護衛艦奮闘記

SHIRANE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
護衛艦奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ８１１８Ｊ

【作者名】
ＳＨＩＲＡＮＥ

【あらすじ】
自然が豊かなここ、北海道は留萌。
数年前に設立された、第五護衛艦群の総監がここにある。
寺井崎は今年、試験艦「あすか」より護衛艦「やくも」の艦長として、ここ留萌に降り立った。
初めてのことばかりで、緊張をする場面もあるけど、
クルー達と打ち解けていく。
一体、どんな物語になるのか・・・？
それは、読んでのお楽しみ・・・にしておきます。

第1章　第1話　「栄転・・・行き先は」（前書き）

２つ目の投稿となりますが、こちらをメインに投稿していきたいと考えています。
お見苦しい文章も多々あるとは思いますが、温かい目でお願いします。
当分、連載するつもりですので見ていただければ幸いです。

第1章　第1話　「栄転・・・行き先は」

第1章　第1話　　栄転・・・行き先は

？　２０１５年４月３日　１１時４０分　？

？　横須賀市船越地区自衛艦隊司令部　？

「辞令、寺井崎護２等海佐。
本日付で、第５護衛艦隊群旗艦「やくも」艦長への
着任を命ずる。
正式着任は、明日１２００とする。
任命者、海上幕寮長　水谷　猛　」

「はっ、拝命いたします。」

今日は、司令部に呼び出され何を言われるのかと思ったが、
どうやら栄転のようだ。

おれの名前は、寺井崎　護。歳は、今年で３０歳となる。
結婚はまだしていない。
付き合っていた彼女とこの前別れたばかりだ。
おれは少しみなよりも出世が早かった。
この前までは、海上試験艦「あすか」で副長を担当していた。

話を戻そう・・・。

「寺井崎君、配属は明日になるので飛行機を手配しておいた。
すぐに向かうといい。ホテルも手配済みだ。」
「幕寮長、感謝いたします。それでは準備がありますので、これで」

そう言って席を立ち、敬礼をし、部屋を後にした。
足早に階段を下り、その足で羽田空港へと向かい北へ飛び立った。

第1章　第1話　「栄転・・・行き先は」（後書き）

羽田か成田か少し迷ったのですが、なんとなく羽田にしました。
少し短い文章ですが、少しずつ長くしていきたいと思います。
次回も少しだけご期待ください。

次回は、北海道着任編です。

第1章　第2話　「護衛艦［やくも］」（前書き）

お見苦しい文章も多々ありますが、温かい目で見守ってください。

第1章　第2話　「護衛艦［やくも］」

第１章　第２話　護衛艦「やくも」
？　２０１５年４月４日　１０時２５分　？
？　北海道留萌市三泊町　海上自衛隊埠頭　？

「寒いな・・・」

寺井崎は、辞令を受けて今北海道の地にいる。
昨夜の便で北海道へ到着し、ホテルに宿泊した。
本来、今日は１２００に地方総監部庁舎に行けばいいのだが、
自分の艦を一足先に見たくなり、ここ海自埠頭に来たのだ。

「俺の艦はどこかな・・・」

あたりを見渡すと、数隻の艦が停泊していた。
すると1番奥に、それらしい艦を見つけた。
ゆっくりと歩いて行くとその艦の前で立ち止まった。
艦首には、［ＤＤＨ１８２］と彫られていた。

「これが、俺の艦か・・・。」

第５護衛艦群は近年発足したばかりで、その旗艦には、
最新システムを搭載した新鋭艦が採用された。
艦橋上部には、ＳＰＹ－１発展型が４基装備され、
主砲には近年国産化に成功した、１２８ｍｍ速射砲が装備されている。
なにより1番ちがうのは艦の大きさだ。
国内初のイージス艦「こんごう」の満載排水量が９４８５ｔだが、

この艦の満載排水量は、１２５００ｔである。
これは５年前に就役した、「ひゅうが」に次ぐ大きさである。
　自分の艦を眺めていると、その艦から人が降りて近づいてきた。

「何か御用ですか？」

話しかけらて、寺井崎も返答する。

「これは失礼、本日付で「やくも」艦長を拝命した、
寺井崎です。よろしく。」

寺井崎という名前に心当たりがあったのか、
すぐに返事を返してきた。

「失礼しました。私は「やくも」副長兼航海長の、
今田と申します。よろしくお願いします。」

寺井崎は、今田を見て若いという印象を持った。

「今田さんは今、歳いくつですか？私は今年３０になるんですが・・・」

「私も今年で、３０になります。」

「そうでしたか、お互い日本の国防のために頑張りましょう！！」

力強くいった寺井崎と今田は握手を交わして、その場を後にした。

第1章　第2話　「護衛艦［やくも］」（後書き）

次回は、一度間をおいて、第5護衛艦群の艦を紹介しようと思います。
連載スピードが少し遅いですが、見ていただける方は少し楽しみしていて下さい。

番外編　「第５護衛艦群艦船紹介」（前書き）

お見苦しい文章もありますが、温かい目で見守ってください。

番外編　「第５護衛艦群艦船紹介」

第５護衛隊群艦船紹介

・第５護衛隊群旗艦「やくも」性能諸元・

排水量　　基準排水量：９４５０トン
　　満載排水量：１２５００トン

全長　１７０ｍ

全幅　２３ｍ

吃水　６．５ｍ

深さ　１４ｍ

機関

ＣＯＧＡＧ方式（１００，０００ｐｓ）２軸推進

ＬＭ６０００ガスタービンエンジン

４基

速力　巡航：３４ノット　　最高：４０ノット

乗員　２５０名　（航空要員３０名を含む）

兵装　１２８ｍｍ速射砲　　３基

高性能２０ｍｍ機関砲　（ＣＩＷＳ）　２基

Ｍｋ４１垂直発射装置　（ＶＬＳ）　７０セル

９１式艦対艦誘導弾４連装発射筒　２基

６８式３連装短魚雷発射管　２基

艦載機　ＳＨ６０Ｊ　哨戒ヘリコプター　（常時搭載）　２機

C４ＩＳＲ　ＭＯＦシステム
ＡＷＳＭｋ８＋ＳＱＱ－８９＋リンク１６／２２／６０

レーダー
ＡＮ／ＳＰＹ－１Ｄ多機能レーダー（４面）１基
ＯＰＳ－２８Ｅ対水上レーダー　１基
ＯＰＳ－２０対水上レーダー　１基
ソナー
ＳＱＳ－５３Ｃ艦首装備ソナー　１基
ＦＣＳ　ＭＫ１６２多機能ＦＣＳ（射撃管制装置）　３基
電子戦・
対抗手段　ＥＳＭ／ＥＳＳＭ／ＥＣＭ：ＮＯＬＱ－２
チャフ発射機　５基

・旗艦以下第５護衛隊群所属艦船・

・やくも　・しきしま
・しらね　・はたかぜ
・おうみ　・いそゆき
・ちはや　・しまゆき
・うんりゅう　・はくりゅう
・くにさき　・さきしま

・わかたけ

＊やくも・しきしまは、イージスシステム搭載艦艇＊

＊しらねは、再改修ののち第５護衛隊群に編入されました＊

＊うんりゅう・はくりゅうは、最新鋭の潜水艦です＊

＊くにさき・さきしまは、呉補給隊より編入されました＊

＊わかたけは、第５護衛艦隊唯一の高速ミサイル艇です＊

・以上、１３隻でやってまいります。・

番外編　「第５護衛艦群艦船紹介」（後書き）

次回は、いよいよ内容に入って行こうと思っています。
時間があれば、また覗いてください。
相変わらず、投稿は遅いですが温かい目でお願いいたします。

第1章　第3話　「［やくも］初勤務」（前書き）

ごゆっくりご覧ください。

第1章　第3話　「［やくも］初勤務」

第1章第3話　「やくも」初勤務

？　２０１５年４月５日　７時２５分　？

？　海上自衛隊埠頭第１バース前　？

「今日は、少し暖かいな～。」

一人つぶやいたのは、艦長の寺井崎であった。

寺井崎は艦長の割には、少し早い出勤である。

ひとり、第１バースを歩いていると後ろからかけてくる

足跡が聞こえた。

「おはようございます、艦長！！」

元気よくあいさつをしてきたその人に、寺井崎は少し困った。

「この人、誰だったかな？」

？マークを浮かべている寺井崎を察したのか、こう返してきた。

「紹介が遅れました、「やくも」砲雷長の水下　恵　３等海尉です。

以後、お見知りおきを。」

名前を聞いてやっと思い出した。

昨日の艦員名簿で見つけた名前だ！！

叫びそうになるのを抑えて、

「おはよう、朝から元気がいいね。」

と話を別の方向にそらそうとした。

「はい、元々元気はあるほうだと思います！！」

どうやら上手くいったようだ。

少し話をしているうちに、艦に到着してしまった。

「それでは艦長、ＣＩＣにてお会いしましょう。」

海自独特の脇をしめる敬礼を残して、士官室に入って行った。

「それじゃ、俺も行くとするか。」
独り言を残して、艦長室へと向かっていった。

？　２０１５年４月５日　７時５８分　？
？　やくも艦尾掲揚台　？

寺井崎は、幹部制服に着替えると艦尾へと向かった。
その理由は、毎朝８：００より掲揚台に国旗を掲揚するからだ。
掲揚台に国旗を掲揚するのは、停泊中の自衛艦船の場合
午前８：００～日没までと海上自衛隊旗章規則第１２条に定められている。
話を戻そう・・・
「国旗掲揚！！」
航海科員の手によって掲揚される。
寺井崎は、その光景を少し懐かしく思った。

？　２０１５年４月５日　８時５０分　？
？　やくも艦長室　？

寺井崎は、着任時に手渡された資料に目を通しながら、
コーヒーを飲んでいた。
砂糖は少なく、ブライトは少し多めだが好みだ。
資料の中でひと際厚い資料があった。
タイトルは、「対艦戦闘訓練の実施　対イージス搭載艦」
と書かれていた。
実施日を見ると3日後、天売島沖で予定されている。
寺井崎は、楽しみであると同時に心配でもあった。
（新しいクルー達と上手くいくだろうか、事故は起きないだろうか。
いろいろとあったが、まずはやってみなけりゃわからない。
まぁ、頑張ろう！！）

と自分で話をまとめて資料に急いで目を通していった。

明日は、初めての出航。何事もありませんように！！

その日は、１日何事もなく終了した。

第1章　第3話　「［やくも］初勤務」（後書き）

見ていただいて、本当にありがとうございます。
連載スピードが遅いうえに、内容もあまりよくないかもしれません。
けれども、自分なりに頑張って書いているつもりですので、できましたら温かい目で見守ってください。
また、ご意見・ご感想をお待ちしています。
よろしくお願いします。

第1章　第4話　「初出航」（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんでした。
ごゆっくりどうぞ。

第1章　第4話　「初出航」

第1章　第４話　初出航
？　２０１５年４月８日　８時５５分　？
？　やくも艦橋　？

寺井崎がこの艦に着任してはや４日が過ぎようとしていたこの日、初めての出航を迎えようとしていた。
艦橋のイスに座っていた寺井崎は、イスから立ち上がって副長に令した。
「副長、出航用意。荷物の積み込み、資材のチェックを急げ。」
「了解しました。…　出港用意！！　出航準備急げ！！」
艦長の命令を受けて、副長が艦内に連絡する。
ほどなくして艦橋に、準備完了の連絡が入ってきた。
連絡を受けると、寺井崎が直接艦内インカムを手に取り令した。
「もやい放て、出航！！　両舷前進微速。」
もやいが放たれると、アンカーも上がった。
「所定位置までの航海を、航海長に委任。」
寺井崎がそう言い終わると副長に任せ、艦長室へ一度戻った。

？　艦長室　？
寺井崎は机に置かれた資料に目を通していた。
出航中は常時訓練が行われているが、今回はイージス艦どうしの対艦戦闘訓練の実施が予定されている。
やくもの相手となるのが同時期に就役した、あたご型５番艦しきしまである。
やくもの方が最新鋭というにふさわしいと思うが、しきしまの艦長は手ごわい。
実は、しきしまの艦長と寺井崎は同期どうしなのだ。しきしまの艦

長は、現場実習でも即戦力と太鼓判を押されたほど有能であった。
その事が寺井崎には不安であった。
今回は、天売島１０?沖で対艦戦闘演習が行われる。
システムのチェックも兼ねて、留萌からＦＴＧ（海上訓練指導隊）も乗り込んでいる。その事もあって皆少し緊張ぎみのようだった。
まぁ、明後日の訓練が楽しみだな…。

?　ＣＩＣ（戦闘指揮所）　?
「艦長、ＬＩＮＫ２２閉鎖します。３．２．１．閉鎖！！」
今回の演習では公平を期すため、ＬＩＮＫ２２が閉鎖される。その中でどのような展開を見せるのか、非常に楽しみだ。

つづく…。

第1章　第4話　「初出航」（後書き）

未熟な文章ばかりで申し訳ありません。
見ていただいた方に本当に感謝の限りです。
ご意見やご感想をおまちしていますので、よろしければ一言お願いいたします。

第1章　第5話　「対水上戦闘実施中」

第1章　第５話　対水上戦闘訓練実施
？　２０１５年４月１０日　９時２０分　？
？　天売島沖　３０？　訓練海域　？
「０９２５よりＣＩＣにて、ブリーフィングを行います。関係科員は集合して下さい。」
艦内に航海長の声が流され、それを合図に集まってきた。
最後の一人が入ってきたところで、艦長が口を開いた。
「今から、対艦演習のブリーフィングを始めます。
航海長、海図を画面に映して下さい。」
「では、前方の海図をご覧ください。赤でマーキングされているのが、データリンク封鎖時の「しきしま」の位置です。」
航海長がゆっくりとした口調で話し始めた。
「おそらく、しきしまは北側から回り込んで攻撃すると予測されます。
我が方は、南側迎え撃つ事になります。」
「では砲雷長、戦闘時の手順を。」
続いて、砲雷長の水下が口を開いた。
「はい、兵装の選定ですがやはりハープーンでの飽和攻撃が最適かと。
いくらイージスといえども、防空にも穴があります。こちらも同じですが。」
言い終わると、自分のイスに座った。
「はい、では以上です・・・。」
寺井崎は、そこで一度言葉を止めると一度息を吸って通った声で令した。
「総員戦闘配置、対空・対水上戦闘用意。対空見張りを厳となせ！！」

言い放つと、寺井崎は武器コンソールの前に立ち、安全装置を解除した。
「武器コンソール、セーフティ解除。システムオールグリーン！！」
いよいよ、演習が始まった…。

？　２０１５年４月１０日　　９時３５分　？
？　同海域　？
戦闘の火蓋を切ったのは、「しきしま」の方からであった。
３発のハープーンが接近しているのであった。
「１－５－２からハープーンが接近、スタンダード発射用意！！」
レーダー員が、声を張り上げて報告する。
「目標ロスト！！　予測コースへ向け、スタンダード発射管制はじめ！！」
砲雷長がすかさず令した。
「了解―。スタンダード発射！！」
スタンダードミサイルが３発データ送信される。
「インターセプト５秒前・・・・マークインターセプト！！」
レーダーから２発のミサイルが消滅した。
「２発撃墜、１発さらに接近。スタンダード防空圏突破、シースパローも間に合いません。」
「主砲、ＣＩＷＳ迎撃に備え。主砲、射程に入り次第攻撃。」
水下が、冷静に指示した。
「了解、およそ１５秒で射程圏内に侵入。」
主砲管制員の声に冷静さが戻った。
「射程圏内侵入、攻撃始め。」
そう言って、目の前のボタンに手をかけて押した。
本来ならば、砲弾が次々打ち出されているころだ。
数十秒後、砲弾が命中してレーダーから完全に消滅した。
「よし、反撃に移る。ハープーン発射用意。」

水下が令すると、寺井崎が何か思いついたのか艦橋に指示した。
「機関全速、取り舵いっぱい。しきしまとの間を詰めろ。」
艦橋は若干混乱したが、最終的には了解と端的に報告してきた。
「艦長、どうお考えですか？私にはよくわからないのですが。」
水下が帽子をかぶり直して、寺井崎に訪ねた。
「なに、ちょっと近接攻撃でもしてみようかと思いましてね。」
水下は？を浮かべていたが、意味に気づいたようだ。
「なるほど、面白いですね。やってみましょう。」
そう言うと、水下は所定の位置に戻った。
「ハープーン、２発撃墜されました。残発１基。」
「副長、敵艦との相対距離は何キロですか。」
寺井崎が、即座に聞くと今田が答えた。
「はっ、えーと７．３キロです。」
これだけ接近しているのに、しきしまは気づいていない。
「よし、主砲しきしまに標準。打ち方始め！！」
寺井崎が令すると主砲のボタンが押された。
「本艦の砲弾がしきしまに命中…あっ、ハープーンも命中！！」
なんと砲弾に気を取られ、ミサイルを撃ちこぼしたのである。
装甲の薄いイージス艦は、想定では大爆発が起きて撃沈だろう。
「そこまで！！演習終了。」
ＦＴＧの主任的男が、声高らかに宣言した。
「０９４２、しきしま、主砲・ミサイルの攻撃を受け撃沈。」
艦長がそれを聞いて、インカムを手に取った。
「対空、対水上戦闘用具おさめ。皆、ご苦労さん。」
艦内の雰囲気には、同じイージスに勝った優勢感が漂っていた。
演習を終えた一同は、天売島にて鋲をおろし束の間の休息をえた。
次は、どうなるのだろうかな・・・。

第1章　第5話　「対水上戦闘実施中」（後書き）

ご拝読ありがとうございます。
更新が遅くなってしまい、本当にスイマセン。
また、気が向いたら読んでください。
ご意見・ご感想お待ちしています。

第1章　第6話　「空を舞うSH－60J（シーホーク）前編」

第1章　第６話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ前編」
？　２０１５年４月１１日　　８時１０分　？
？　天売埠頭第１バース　？
艦尾に国旗が掲揚されて、また1日が始まった。
寺井崎は、艦長室で事務整理を片づけていた。
「カタカタ・・・カタタ・・カタカタ」
パソコンを打つ音が、本に囲まれている部屋を包む。
「えーと、今日の訓練は何だったかな？」
度忘れしてしまったのか、手元の紙に目を通す。
今日の日付を見ると、午前に発着艦訓練・午後から
傷病者搬送訓練が予定されていた。
やくもは、常時2機のシーホークを搭載しているので、
頻繁に発着艦訓練が行われる。
寺井崎がこの艦に着任してから、これが初めての訓練となる。
したがって、パイロットたちを見るのも初めてという事だ。
どんなパイロットがいるのだろうか？少し楽しみだ。

？　天売島沖１０？　？
「こちら、やくも所属ＳＨ－６０Ｊ。着艦許可を願います。」
ＳＨからの通信が発着艦指揮所に入ってきた。
「こちら、やくも。着艦を許可します、北寄りから進入願う。」
「ＳＨ－６０Ｊ了解。北側から進入する。」
こう言い終わると通信が切られた。
この通信を合図に、後方の転落防止柵が水平上に下げられる。
着艦時の事故を防ぐためでもあるが、こうしないと場所がないのだ。
「バラバララ・・・・」
プロペラの回る音が徐々に近づいてきた。

その音を聞いて、発着艦管制員が甲板に出てきた。
？　ＳＨ－６０Ｊ機内　？
「木村教官、着艦目標まで残り２？です。」
「了解。河野３曹、気を抜くなよ。」
教官と呼んでいるのは、河野　遥３曹で、配属されたばかりである。
一方、教官と呼ばれているのは、木村　卓２等海尉で、配属されて５年目になる。
「教官、残り１？です。正面に、管制灯を確認。」
「よし。機器類、異常なし。最終進入コース固定。」
木村は、黙々と機器類の異常がないかチェックしていく。
河野も、木村の技を盗もうと必死である。
そうこうしている間に、５００ｍまで近づいていた。
「残り５００ｍ。進入コース問題なし、接近物なし。」
河野が報告すると、木村が了解と呟いた。
「バラバララララ・・・・」
プロペラの風圧で、近くの海が波立った。
「間もなくやくも。レーダー、機器類オールグリーン！！」
「了解。河野、八雲との通信回線開け。」
木村の合図で無線の回線を開いた。
「こちら、やくも所属ＳＨ－６０Ｊ。着艦管制を要請する。」
返答はすぐに返ってきた。
「やくも了解。発着艦管制員の指示に従って下さい。」
「了解。」
これを最後に、甲板の管制員に無線が切り替わった。
「ヘリダウン、ヘリダウン。そのまま。」
絶妙なコントロールで徐々に艦へと近づく。
「ヘリダウン、ヘリダウン、キープ、キープ３・２・１着艦！！」
管制員の声と同時に、ヘリが甲板上に着陸した。
航海科員が出てきて、ヘリを甲板上に固定する。

「よし、着陸完了。」
思わず声が出たのか、あわてて口をふさいだ。
「よし、降りるぞ。河野、フライト記録機を持ってこいよ。」
「はい、分かりました。」
河野もあわてて返事を返して、レコードを抜き取った。
「ふーぅ。神経使うなぁ～。あぁ疲れた。」
そう言って、ＳＨ－６０Ｊのブリーフィーリング室へと向かった。

？　やくも艦橋　？

「いやぁ～きれいに着陸するもんだな。だれだ、パイロットは？」
寺井崎が聞くと、水下が答えた。
「あれは、木村　卓３尉ですね。今回の教官を務めています。」
手元の紙に目を落としながら答えてくれた。
「木村３尉か、覚えておこう。」
言った通り、すぐ頭に記憶した。
「午後の訓練は誰が操縦するのだろうか？楽しみが１つ増えたな～。」
そう言うと、艦長室に事務整理に戻っていった。

第１章　第６話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ（シーホーク）前編」（後書き）

ご拝読いただきありがとうございます。
ご意見やご感想お待ちしております。

第1章　第7話　「空を舞うSH－60J（シーホーク）中編」

第7話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ中編」
？　２０１５年４月１１日１３時２５分　？
？　航空科ブリーフィング室　？
「えーでは、午後の搬送訓練のブリーフィングを始めます。礼。」
開始の宣言で、ブリーフィングは始まった。
「今回の訓練は、傷病者をやくもから陸へ搬送するものである。
　速やかな搬送を有するので、スピードが重視されるが、
雑に行っては意味がない。丁寧に、そしてスピーディに行う事！！」
今回の教官である木村が、真剣な表情で話していた。
そして、今回の訓練担当が発表された。
「今回は、木村・河野組と山村・福村組とする。それぞれ開始の、
　１３５０までに機体の点検を済ませておくように。以上解散！！」
そう言って話がたたまれた。
ブリーフィング後、河野は木村に話しかけられた。
「午後の搬送訓練も、気を抜くなよ！！」
強めの口調で言われたことに、それは心配という事だと受け取った。
河野は、木村と別れた後、ＳＨ－６０Ｊへと向かった。

？　艦長室　？
寺井崎は相変わらず、忙しそうに書類整理に追われていた。
１時間以上パソコンを打ち続けている手は、今にも取れてしまいそうだ。
「あー疲れたな。後、どれだけあるのかな～」
と言って右側の書類棚を見て、テンションが一気に落ちた。
少なく見積もっても、５０枚以上あるのだった。
「こまめに整理しておけばよかったな～」
心中で、今頃悔やんでも遅いけどと付け足した。

時計に目をやると、１３時１５分を回ったところであった。
「まだ、訓練には時間があるな。よし、片づけとくか！！」
と言ってまた、手を動かし始めた。

？　ＳＨ－６０Ｊ格納庫　？
「えーと、機器類異常なし。燃料計、異常なし。・・・」
ぶつぶつと指さし確認をしている声が格納庫に響く。
一人で確認しているのは、副操縦士の河野　遥３曹である。
この時点で、自分が操縦する事になるとは思っていなかっただろう。
「おう、早いな。どのくらい進んだ。」
白手袋をはめながら近づいてきたのは、教官の木村３尉だ。
「はい、えーとー機器類の点検まで終了しました！？」
突然の声に驚いて、河野は疑問形で慌てて返事を返してしまった。
「まぁ、そんなに慌てなくてもいいから。落ち着け！！」
あまりに慌てていたので、木村が一言怒鳴ってしまった。
「すみません！！」
河野もつられて大きな声であやまってしまった。
「まったく、なんでそんなに焦るんだ。俺が何かしたか？」
木村が気を落ちつけながら話し始める。
（いや、十分してるんですけど・・・。）
河野が内心そう思っていると、木村が
「十分しているって、顔に出ているぞ。」
指摘され、顔をつい押えてしまった。
「冗談だって。俺、一回部屋戻るから点検頼むぞ。」
そう言って、格納庫から出て行った。
「ふぅーびっくりするな。」
河野も気を落ち着けて、残ったところの点検を始めた。

？　同日　１３時４０分　？
？　航空科ブリーフィング室　？

「えーでは、最終確認を行います。先に山村組が天売島ＨＰまで
傷病者を搬送後、木村組が搬送を行います。その際、実際に
傷病者役を乗せるので、事故等がないよう最善を尽くすように。」
航空主任が、何か質問は？と聞くと木村が手を挙げた。
主任が、何か質問は？と聞くと木村が手を挙げた。
「傷病者役は誰がするのですか？」
素朴な疑問かもしれないが、パイロットには重要な事だ。
「えーと、山村組が航海長で、木村組が艦長だ。」
木村も河野もお互いに聞き直した。
「なんて言いましたか！？」
見事なはもりだった。
主任も笑いながら、もう一度復唱した。
そして、すぐに各員が配置につく。
木村＆河野も？を浮かべながら、格納庫へと走った。
訓練開始の５分前の事であった・・・。

第1章　第7話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ（シーホーク）中編」（後書き）

本当は、前・後編で決着しようと思ってたんですが・・・。
思ったより内容が膨らんだので、３部構成にしました。
長々となってしまいましたが、是非後編もご期待ください。
また、ご意見やご感想お待ちしております。

第1章　第8話　「空を舞うSH－60J（シーホーク）後編」

第1章　第8話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ後編」
？　２０１１年４月１１日　１３時５０分　？
？　やくも格納庫　？
「オーライ、オーライ、オーライ・・・」
航空科員が、後方のヘリポートにシーホークをけん引する。
「オーライ、オーライ、ストップ！！　甲板に固定。」
ストップの掛け声で、けん引が止まった。
そして、手元のインカムで航空指揮所に連絡を入れる。
「こちら後部ヘリポート。発艦準備完了、指示を乞う。」
「こちら航空指揮所、了解。訓練開始、各班指示書を開封せよ。」
そう言われて、主任が指示書を開き、内容を報告した。
「１３５０、航海長がＣＩＣにて負傷。至急、緊急搬送する。」
了解の代わりに、右の親指を立ててヘリに乗り込んだ。
「バババババ、バララララ・・・・」
勢いよくエンジンが回され、プロペラが回転し始める。
「こちらＳＨ－６０１山村。傷病者の収容を願う。」
「了解した。至急搬送する。」
交信が終了すると、本当に航海長が収容された。
「こちらＳＨ－６０１山村。収容完了、これより天売島へ搬送する。」
そう言って交信を切ると、山村が操縦桿を握り上昇させた。
巧みなテクニックで、あっという間にやくもから遠ざかって行った。
１０分後・・・。
「こちらＳＨ６０１。傷病者の搬送を完了。これより帰艦する。」
わずか１０分で天売島へ搬送してしまった。
次は、私達の番だ…。

胸が激しく鼓動をを刻んでいるのが自分でもわかる。
すると木村が近づいてきて、河野の頭にポンと手を置いた。
「緊張するな。落ち着いて、いつも通りでな！」
と優しく声をかけてくれた。
この状況では、ありがたく感謝しておく事にしよう。
そうこうしている間にヘリが帰艦して、格納庫に収容された。
続いて、木村たちの乗る２号機がヘリポートに出される。
固定作業が終わると、作業員が指揮所に連絡を入れた。
「航空指揮所了解。訓練開始、各班指示書２を開封せよ。」
主任が開封して、例のごとく報告する。
「艦橋への至近弾でガラスが艦長を直撃。至急、搬送を行う。」
また先程とは、違う指示がなされる。
ヘリに乗り込むとエンジンを始動させる。
「バババババラバラバラバラバラ・・・・」
勢いよくプロペラが回転を始める。
「こちらＳＨ－６０２木村。収容準備完了、収容願う。」
冷静な声で指揮所と交信を始める。
「指揮所了解。至急収容する。」
その通信と同時に、艦長が広い機内に収容された。
「こちらＳＨ－６０２木村。収容完了、これより搬送する。」
交信を切り機体を上昇させると、とりあえず艦から離れた。
そして、「河野。」と呼びかけた。
河野も「はい！！」と元気よく答えた。
「Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ａ　ｃｏｎｔｒｏｌ」とインカム越しに言った。
河野は、「へっ！？」と間抜けな声を出して返事した。
木村が、返事はと言われて我を取り戻した。
「Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｃｏｎｔｒｏｌ」と答えた。
木村が操縦桿から手を離し、河野が代わりに握った。
ヘリは、そのままの軌道で天売島を目指した。

「天売島ＨＰまで残り２?。周囲警戒　！」
木村が機長席から河野をバックアップする。
河野もいけるぞと思い始めた時である、突然警報が響いた。
「ピピピピピピピピピピ・・・」
断続的な警報の後、あるランプが点滅し始めた。
「エンジントラブル」
木村も初めて経験する状況であった。
しかし、整備員からも報告は上がっていない。
木村はすぐに、航空指揮所に緊急コールを入れた。
「ｅｍｅｒｇｅｎｃｙｃａｌｌ、１４０３にエンジントラブルを示すランプが点灯！！
　至急、指示を願う。現在、天売島沖１?地点。」
「こちら航空指揮所。ＨＰへの緊急着陸を許可する。消防へも連絡をしておく。安全におろせ、以上。」
指揮所との交信が終わったタイミングで、河野が
「Ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ａ　ｃｏｎｔｒｏｌ」と木村に伝え、
「Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｃｏｎｔｒｏｌ」と木村が答えた。
「天売島ＨＰまで残り５００ｍ。消防車も待機済みです。」
河野が冷静に、木村へ伝える。
「艦長、少し我慢して下さいね。」
と木村が笑顔で伝え、着陸の準備を整えた。
「前方にＨＰを視認。着陸誘導、手動にセット。準備よし。」
河野が、計器類を操作して準備を整える。
「これより、緊急着陸を行う。目標よし、下降始め。」
木村の声と同時に、機体が下降し始める。
高度計の数値もだんだん下がってきた。
「頼むからエンジン停止だけはやめてくれよ。」
心から思っていたが、最悪の事態が起きてしまった。
「教官、エンジン停止！！再始動利きません。」
「オートローテーションに入る。地上の安全を確認しろ！！」

オートローテーションとは、ヘリコプターのエンジンなどが停止した場合に、安全にヘリコプターをおろす方法である。
ヘリパイは、この技術を必ず習得させられる。
しかし、実際に使うのはほんの一握りしかいないのだ。
（実際にやりたくないけど・・・。）　話を戻そう。
「ＨＰまでの距離１００を切りました！！現高度、５５０フィート。」
河野が若干のパニックを起こし始めている。
「河野、まず落ち着け！！艦長まで、不安になるだろうが。」
木村の声で、なんとか落ち着きを取り戻した。
「間もなくＨＰだ。着陸誘導手動に設定。河野頼むぞ！！」
「了解・・・。距離５０ｍ、速度１００準備よし。」
ヘリコプターがＨＰに近づき、誰もが無事を祈った。
「バララララララ・・・」
「着陸！！」
河野が叫んだ。
若干の衝撃があったものの、見事なオートローテーションであった。
回転しながら近づいた機体を制御しながら、ＨＰに着陸させた。
乗員・機体共に怪我はなく、やくもの帰港までしばし待機することとなった。
やくもの到着を待って、トラブルの原因が調査される予定だ。
しかし何より、全員が無事でよかったというところだ。
ヘリを降りると、艦長に声を掛けられた。
「木村３尉、無事におろしてくれて有難う。今後も頑張ってくれ。」
がっちりと握手を交わし、木村と河野は無意識に敬礼をしていた・・・

第1章　第8話　「空を舞うＳＨ－６０Ｊ（シーホーク）後編」（後書き）

はじめて書くヘリの描写は、思ったよりも難しかったです。
荒い面が目立つと思いますが、その辺はご配慮ください。
また、ご意見やご感想をお待ちしております。
次で、第1章を終了して第2章に入ろうと思っています。
また、次回も見に来てください。

第1章　最終話　「弾道ミサイルを迎撃せよ！！」

第1章　最終話　「弾道ミサイル迎撃を迎撃せよ！！」
？　２０１５年４月１３日　８時００分　？
？　やくも艦尾掲揚台　？
「国旗掲揚！！　総員敬礼。」
先任伍長の声が艦内に響き、それぞれの場所で敬礼をする。
予定ならば三泊町の海自埠頭に帰還しているはずだったが、先のヘリのトラブルもあり予定が１日延長される事が正式に決定した。
ＳＨ－６０Ｊと整備員を天売島に残して一路、訓練海域へと向かった。

？　艦長室　？
相変わらず寺井崎は自室で、報告書の整理をしていた。
しかし前より、棚がすっきりとしていた。
「あぁ、だいぶ片付いたな。今日は、１０００からＭＤ防衛の訓練だな。
　試験艦にいたころ、映像だけは見た事があるけど・・・実際は初めてだ。」
この訓練は、イージス艦の必須というほどの訓練科目の一つとなりつつある。
数年前、自衛隊法８２条の３「弾道ミサイル等に対する破壊措置」につけ加え、
迎撃精度維持を目的に、年２回以上の迎撃訓練を行う事が盛り込まれた。
その模擬弾道ミサイルの発射基地が、全国に５つ建設された。
北海道の第１防弾基地、小笠原諸島の第２防基、紀伊半島沖の第３防基、
呉基地５０？沖の第４防基、そして佐世保基地４５？沖の第５防基

である。
今回「やくも」「しきしま」の両艦は、第1防基で発射された弾道ミサイルを
迎撃するのが主目的だ。
現在、自衛隊では3年前の「ちょうかい」の迎撃失敗以来、迎撃ミスは皆無
である。今回も、無事迎撃できるのか・・・。

？　しきしまＣＩＣ　？
ＣＩＣは相変わらず、薄暗い中に海図を中央に映しだしていた。
「艦長、訓練海域までおよそ２５？。同海域到着、０９５０予定。」
レーダー員が、海域までの距離を報告する。
「わかった。艦橋へ、巡航速度を維持せよ。副長、私は艦長室へ戻る。
　後は頼んだから、到着１０分前になったら連絡をくれ。」
「はっ。了解しました、副長指揮権を委任されました。」
副長がよく通る声で宣言した。
「よろしい。後は、頼むぞ！」
そう言うと、艦長室へ戻って行った。
？　やくもＣＩＣ　？
「副長、現在訓練海域付近で濃い霧が発生しているようです。」
気象士が、ＣＩＣで副長に報告する。
「気象台からの発表は、何かあったか？」
「はい、先程この辺りの海域に「濃霧警報」が発表されました。」
副長の質問に淡々と、気象士が答えていく。
「わかった。ちょっと艦長室へ行ってくる。砲雷長、航海指揮を一時委任します。」
「はい、了解しました。」
水下が了承の意を伝えると、今田はＣＩＣを出て行った。

？　やくも艦内通路　？
「ご苦労様です！！」
艦内通路を通っていると、若い声がこだまする。
自衛隊は上下関係が厳しく、階級が少し上ならば敬う態度をとる。
今挨拶してきたのも、航海科の新任士官だ。
敬礼がピシッと決まって、なんだか様になっていた。
そうこうしている間に艦長室へ到着した。
「コンコン。すいません、今田です。よろしいですか？」
「はい。どうぞ入って下さい。」
ノックをすると、すぐに返答があり部屋に通された。

？　やくも艦長室　？
「失礼します。」
そう言って、今田君が部屋に入ってきた。
「どうしたんだ？何かあったのか？」
副長がここに来るのは大抵、何かあった時だからだ。
「いえ、訓練海域が濃霧で覆われていまして、出来ましたら艦長にＣＩＣへ
　入っていただけたらと思いまして・・・。」
濃霧に覆われた海域での航海は、いつも以上の操艦技術を要する。
大抵の場合
航海長がその任を負うが、まれに操艦が苦手な航海長も存在する。
つまり・・・そういうことだ。
「分かりました。一緒にＣＩＣへ降りましょう。」
了承の意を伝えると寺井崎は、残っていた事務資料を机の中にしまい艦長室の
外へ出た。
扉のところで指紋認証ステムに指紋をかざして、部屋をロックした。
？　やくもＣＩＣ　？
「艦長、入られます！」

入口の士官が、ＣＩＣに通る声で報告した。
寺井崎がＣＩＣに入ったのを見て、水下が近寄ってきた。
「艦長、航海指揮権を返納します。」
そう言って敬礼した。
「航海指揮権、確かに引き継ぎました。」
そう言って寺井崎も自分の椅子に腰掛けた。
そこで、レーダー員がＣＩＣに報告した。
「訓練海域までおよそ１０?。対水上見張りの強化を進言します！」
「進言を許可する。ＣＩＣから艦橋、対水上見張りを厳となせ！！」
寺井崎が進言を受けて艦橋に見張りの強化を通達した。
そこで、砲雷長が口を開いた。
「艦長、只今よりブリーフィングを始めたいと思うのですがよろしいですか?」
「えぇ、いいですよ。」
「では、只今よりブリーフィングを行いますので中央海図に集まって下さい。」
水下の指示でＣＩＣの戦闘要員が中央の電子海図の付近に集まる。
「はい、では訓練の概要について説明します。ご存じの通り、ＭＤ防衛を行う
のですが、基本的にスタンダードでの迎撃に失敗するともう迎撃を行う事は
できません。なのでそれまでに決着をつける必要があります。」
弾道ミサイルは、打ちこぼしてしまうと大変な被害をもたらす危険が高い。
そのため、大変な練度を要する問題となりつつあるのだ。
こうしている間にも水下が話を進めていった。

?　同日１０時００分　?
?　訓練海域　?
いよいよ、ＭＤ防衛の訓練が始まった。

最初は、やくもから始められた。
イージス艦は、最大探知距離４５０?以上・最大探知数　２００以上を誇る。
つまり、第１防基から発射された模擬弾道ミサイルは発射時点で既に、捕捉
していなければならない計算である。
捕捉から迎撃までのスピードが、これの分け目だろう。

?　やくもＣＩＣ　?
「１０００時、対空目標探知。高速で本艦方向に接近、スピードから弾道ミサイル
　と推定される。レーダー監視を厳となせ。」
砲雷長が、ＣＩＣ全体を見回しながら指示した。
砲雷長に続いて、レーダー観測員が報告を急いだ。
「本艦迎撃範囲侵入予定、１００５時。高速で本艦に近づく!!」
それには見かねて、砲雷長が落ち着かせた。
「観測員、落ち着け。落ち着かないと何もできないぞ～。」
どうやら落ち着きを取り戻したようだ。

時間は、無情に過ぎていく。
「弾道ミサイル、迎撃ラインに侵入。スタンダード発射管制始め!!」
砲雷長が令すると、前部甲板のＶＬＳからスタンダードミサイルが発射された。
「ビシュュュュュュュュ・・・」
凄まじい爆風を残して空に舞い上がり、目標へ向かっていった。
「スタンダード目標に飛翔中。レーダーにその他目標なし。」
レーダー員が綿密に報告を繰り返す。
「インターセプト５秒前、４、３、２、１、マークインターセプト!!」

「ドン！！」
外で破裂音がした。
この模擬弾は迎撃すると、猛烈な光と破裂音を発するのだ。
という事は・・・。
「レーダーより各員へ。弾道ミサイルのマーク消滅、迎撃成功です！！」
「わぁー・・・」
艦内に歓声が沸き起こった。
やはり迎撃できたというのは、練度が上がってきている証拠だからだ。
「艦長より各位へ、ご苦労だった。これより本艦は、天売島へ寄港後留萌へ帰還する。現時刻を持って、第３哨戒配備を発令する。」
艦長の言葉でみんなが我に返り、自分の持ち場へと戻っていく。
先に天売島へ向かったやくもにのちに連絡が入った。
しきしまも打ちこぼすことなく、迎撃に成功したそうだ。
「（まぁ、あいつなら当然か・・・。）」
寺井崎は、心中そう思いながら艦長室へ戻って行った。
そして、「やくも」・「しきしま」両艦は合同演習を無事終了した。
二つの艦の航跡（ウエーキ）が、なんだか惜しんでいるようだった。

第1章　最終話　「弾道ミサイルを迎撃せよ！！」（後書き）

これで、第1章が終了しました。
次から第2章へと移っていくのですが、どうしようか考えていませんが数日中に
次話投稿を行おうと思いますので、どうぞお楽しみに。
それでは、また次回お会いしましょう。
さようなら・・・。

番外編　「舞鶴教育隊の日常」

番外編シリーズ１　「舞鶴教育隊の日常」
？　２０１５年４月３０日　６時１５分　？
？　京都府舞鶴市舞鶴基地内教育隊　？
「１・２・１・２・・・」
ここ海上自衛隊「舞鶴基地」では、日々訓練を重ね一人前に近づこうと努力している若人がいる。
「舞鶴教育隊」。
海風が差し込むこの場所では、現在も多くの自衛官を育て育んでいる。
「１・２・１・２って、声が小さいぞ！しっかりと出していこうぜ！！」
ここで一人ボケツッコミをしているのがその一人、
松宮　脩平　（２０）　２等海士である。
（３士は、２０１０年１０月１日の２士昇格を持って廃止されました。）
「いちいちうるせぇな、お前こそ前見てって危ねぇ！！」
危うくこけそうになったのは、同じく２等海士の佐田　明　（２０）である。
こんな、賑やかな場所で毎日を過ごしている２等海士を追った。

？　同日　　８時１５分　？
？　第２庁舎内　教務教室　？
「起立、礼、着席。」
今日の日直が号令をかけ、午前の教務が始まった。
教務は主に、海上自衛隊の規則・礼儀などを行います。
「えーでは、全員テキストのＰ２を開け。」
教官が、教壇の上から生徒たちに促す。

２ページには、海上自衛隊の規則が１から記されていた。
ここで早速、教本を閉じようとしている奴がいた。
「おい、松宮！教本を閉じるのはまだ早いと思うぞ。」
と言いつつも教官は手に持ったチョークを力いっぱい投げつけた。
「痛った！！」
見事なコントロールを誇る教官のチョークは、真直ぐ松宮に命中した。
「すまん、すまん、手が滑ってしまった。」
わざとらしく教官が言う。
「さて脱線してしまったが、海上自衛隊の規則について順に説明する。」
教官が、教本を見ながら生徒たちに覚えやすいよう工夫を凝らしていく。
しかし、今度は別の場所で教本を閉じようとする奴がまたいた。
「こら、佐田！！真面目に聞けや、なめんとのかぁ！！！」
関西独特のトーンで教官がついにキレた。
それには佐田もタジタジである。
「申し訳ありません。」
「お前と松宮、午後一番で腕立て３００！！１０分以内に済ませろ。」
教官が若干無茶な要求を立てるがこれには松宮が反論した。
「なぜ僕もですか、教官！」
「お前もさっき怒ったやろうが！！腹立ってきた、腕立て４００に変更！！！」
「「ええっー」」
「じゃかましい！！わかったら返事は！！」
「「了解。」」
教官が怒りを抑えて、黒板に向き直り板書を始めた。
今度は全員がノートを開き、板書を書き写していく。
３０分ほどしたところでチャイムが鳴り、１５分の休憩をはさんだ。

休憩の後は、全員が真剣に教務に取り組み昼食に移った。

？　同日　１３時００分　？

？　第１グラウンド　？

「１１０、１１１、１１２、１１３、１１４、・・・」

グランドでは誰よりも早くから、罰則の腕立て伏せをしている２人がいた。

訓練は、１３時１５分からなのでそれまでに済ませなければ倍に増える。

２人は必死に、手を動かし頑張っていた。

しかし、時間とは非情なものであった・・・。

？　同日　１３時１５分　？

「３９７、３９８、３９９、４００！！」

腕立てが終わり時計を見ると１５分であった。

「よし、なんとか間に合ったんじゃないか！」

佐田が言うと松宮も頷き、整列を始めた。

しかし、時間なのに誰も来ない。

なぜだろう、二人は不思議に思い隊舎に聞きに言った。

すると驚くべき事実を知った。

「えっ、今日は体育館で集団行動の訓練じゃないのか！？」

「「えっーー」」

確かに予定を見るとグランドではなく、体育館になっていた。

「あのやろーだからグランドって言ったのか。」

そう、心理的に仕組まれた教官の罠であった。

まぁ、引っ掛かる方もどうかと思うがな・・・。

急いで体育館に行くと教官が竹刀を持って待っていた。

「松宮、佐田・・・どうしたのかな～こんな時間に？なめとんのかぁ！！」

そう言うと同時に竹刀を振りおろしてきた。

油断していた松宮だが、間一髪で避けたが佐田は・・・、
「バシーン！！！！！」
見事に命中してしまった。
佐田はそのまま医務室へ搬送された。
そして、この日の訓練は松宮一人だけ腕立て１０００回・腹筋２０００に処された。
（後日、佐田も腕立て１０００回・腹筋２０００が言い渡されました。）
こうして日々、レベルアップに励む隊員たちが多くいる舞鶴教育隊であった。

番外編　「舞鶴教育隊の日常」（後書き）

本当は第2章に入ろうと考えていたんですが、一度間をおいて話の方向性を決める意味でも番外編を一度挟みました。
これからもちょくちょく挟んで行こうと思いますので、ご理解ください。
次こそ、第2章に入っていきます。
楽しみにされていたみなさん、本当にスイマセンでした。

第2章　第1話　「舞鶴の今日は晴れだった！？」

第2章　第1話　「舞鶴の今日は晴れだった！？」
？　２０１５年５月１日　１０時００分　？
？　海上自衛隊　舞鶴基地周辺　？
柔らかな日差しに包まれて、今日も1日がスタートしていた。
ここ「舞鶴基地」は、地方隊唯一の日本海側に面している基地である。
そのため、２００８年には「第２３航空隊」が新設され常時、１２機のヘリが
常駐させられるようになり、この基地の重要性がさらに増してきていた。
「うーん、今日はいい日差しだな。」
一人つぶやいているのは、ご察しの通り寺井崎である。
なぜ留萌所属の寺井崎がここにいるのかというと、5日前に遡る事になる。

？　２０１５年４月２６日　１２時００分　？
？　留萌基地　基地司令室　？
「、コンコン、、寺井崎ですが・・・」
いつもより小さめの声でノックした場所は、基地司令室であった。
何か話があるとのことだが…。
「あぁ空いてるよ、まぁ入りたまえ。」
「はっ、失礼いたします。」
そう言って寺井崎は、基地司令室のドアを開け中に入った。
「何か御用でしょうか、基地司令。」
寺井崎は思っている事を素直に口にした。
私の前に立っている人こそ、留萌基地司令の［野々宮　明］海将補である。

海将補など、到底自分がなれる位などではない。
そのため、寺井崎はいつもより緊張している面持ちだ。
「まぁ、リラックスしなよ。まぁ話といえばね、君にね１ヶ月間舞鶴の方に
　勤務してもらう事が決まってね。」
「はぁ、舞鶴・・・ですか。」
「いや、「あたご」の艦長が胃潰瘍で入院してね、その間勤務してほしいとの
　事なんだ。幸いこっちは訓練がないから１ヶ月間抜けても大丈夫だから、
　受諾したんだけどよろしく頼めるかな。」
「はっ、海将補のご命令とあらば舞鶴へ１ヶ月間勤務します。」
「よく言ってくれた。それではよろしく頼むよ。」
そう言って、司令室を後にした。

？　２０１５年５月１日　１０時０３分　？
今日の１２００に着任する予定の寺井崎は、先に舞鶴地方総監部へ先に挨拶へ
行くことにした。
「へぇ～、すごいきれいな場所だな。」
寺井崎がそう思ったのはおそらく、塗りたてのペンキのせいだと思う。
スタスタと門の所の警衛に敬礼をしつつ、門をくぐり庁舎に入って行った。

？　舞鶴基地総監部庁舎　？
寺井崎は庁舎に入るとまず、受付に行った。
「すいません、寺井崎というものですが基地司令にお取次願えないでしょうか。」
そう寺井崎が言うと、受付係がすぐに取り次いでくれた。

隊員に案内され基地司令室にたどりつき、部屋に通されるとそこには品格の
漂う男性が一人、幹部制服に袖を通し座っていた。
「あちらが基地司令の、菅田　勇人　海将であります。それでは、失礼します。」
そう言って案内してくれた隊員は、部屋を出て行った。
「まぁ、そこにかけてくれ。」
開口を切ったのは菅田の方だった。
「はい・・失礼します。」
（留萌の基地司令で海将補なのに、この人は海将・・・
寺井崎の緊張もピークに達しようとしていた。）」
「まぁ緊張しないで、ようこそ舞鶴へ！私が基地司令の菅田だ、宜しく。」
まずは軽い挨拶からスタートした。
「留萌総監部より派遣されましたやくもの寺井崎です。宜しくお願いします。」
菅田の柔らかな口調に寺井崎も次第に緊張が薄れていった。
話は流れに流れてまとめの部分に入って行った。
「まぁ短い間だが、ここで学べることもあると思うから頑張ってくれ。」
「はっ、ご期待に添えられるよう精神誠意頑張らさせていただきます。」
「では、失礼します！」
そう言って寺井崎は部屋を後にし、ひとまず市内のホテルへと向かった。
本来宿舎に入るはずなのだが、あいにく部屋の整理がついていないらしく
今日だけホテルにとまることになった。
したがって、本格的な業務は明日からとなった。
優しそうな司令だが、寺井崎は留萌で学んだ事がひとつ・・ある。

人の固定観念に縛られない、という事だ。
固定観念に縛られると、今後の業務に支障をきたす場合があるからだ。
「まぁ、ぼちぼちやっていくか～。」
明日からの業務を楽しみに、寺井崎はホテルに向かっていった・・・。

第2章　第1話　「舞鶴の今日は晴れだった！？」（後書き）

数日中と言っていたのに更新が遅れてスイマセンでした。
二話目の舞台は「舞鶴」、どことなく留萌を思い出す人物の登場も予定しています。まぁ、二話目からもぜひ、ご期待ください！！？

第2章　第2話　「舞鶴の日常～漏電警報～」

第2章　第2話　「舞鶴での日常～漏電警報～」
？　２０１５年５月２日　８時１５分　？
？　舞鶴基地第１運動場　？
寺井崎はかつてこれほどの緊張が訪れた事があっただろうか？
いや・・・あったな・・。
それも、昨日の事だ。
まぁ、それは置いといて・・・寺井崎は今、朝礼台の上に立っている。
「うぅ～、なんで朝礼台の上なんだ！？下でもいいのに・・・。」
それもそうだ。
いつも寺井崎は朝礼の時、下でしゃべっているからこれにのる必要等無いのだ。
しかし、その場所その場所の慣例に従うのが自衛官としては全うな事なのだ。
「よし・・・！！！」
自分の中で覚悟を決め、朝礼台から２ｋｍ先まで通りそうな声で挨拶をした。
「留萌総監部から派遣されました、寺井崎　護　３等海佐です。
　１か月という短い間ではありますが、精一杯努力していきますので宜しくお願いします！！！！」
気合を入れすぎて、語尾だけ無駄に強調してしまった。
そう思ってもすで遅し・・・若干下士官の間で笑われてしまっている
朝礼台を降りながら「しまったな・・・」と呟いた。
今日知りあったばかりの副長、谷と一緒に庁舎２階の１７７指令室へと
向かった。指令室では、停泊中の艦船の状況が随時確認できるよう
数年前から

各艦ごとに部屋を設け確認する体制を設けている。
通常艦長・副長が確認を受け持つが、場合によっては当直官が確認する場合もありうる。
話を戻そう・・・。

？　２０１５年５月２日　８時４０分　？
？　舞鶴本庁舎２階１７７号指令室　？
「いやー暑いですな。５月なのに・・・。」
副長の谷が愚痴りながら椅子に腰かける。
「ホントだな～いや暑い。」
そう言いながら自分も椅子に掛ける。
部屋の中は冷房が利いていて居心地がとてもいい。
寺井崎は部屋のパソコンのスイッチを入れて、モニターを始めた。
部屋の中に配置されている計器類がときたま光っては消える。
ぼーっと計器類を見ていると１個だけ消えたままのランプがある。
ランプの上の場所を確認すると、第１機関室になっていた。
谷に場所を確認すると、船底の方だそうだ。
寺井崎は部屋の直通無線を手に取り、あたごに連絡を取った。
「はい、あたご艦橋三浦です。どういたしましたか。」
無線に出たのは、当直士官の三浦２等海尉であった。
「寺井崎だが、第１機関室の様子がおかしい。至急当直を向かわせてくれ。」
「はっ、了解しました。報告まで暫しお待ちください。」
そう言って無線は一度切られた。
数分待つと先程の士官から報告が入った。
「艦長、どうやら漏電防止装置が作動したようで・・・現在原因を調査中です。
　原因が分かり次第、そちらに報告させていただきます。」
「了解した。当直任務を続けてくれ。」
そう言って寺井崎は無線を棚に引っかけた。

「谷さん、この第1機関室はいつも調子がおかしいのですか？」
さん付けで言ったのは、年齢の面を考慮してのことだった。
「いいえ、いつもこんな事はありません。漏電防止とは、妙だな・・・」
谷が首をかしげながらも、再び椅子に座ってランプを監視し始めた。
寺井崎も自分の椅子に戻り、谷に倣った。

？　同日　9時55分　？
？　あたご第1機関室　？
「なんだこれ、ひどいなぁ～」
機関室全般の管理を任されている、真田1曹が呟いた。
先程発生した漏電警報の詳細調査のために機関室に駆り出された。
その機関室に来てみれば、辺り一帯が真っ暗だ。
おそらく漏電警報で機関室一帯の電源をシャットアウトしたんだろう。
「さぁ、こう暗くっちゃ仕事できないな。よし、高橋！電源。」
照明機材を持っている隊員に照らすよう指示した。
1分満たないうちに照明のおかげで、辺りが明るくなった。
「よし、修理するぞ！！まず、配電盤から修理する。かかれ！！」
真田の声で4人の隊員が修理を始めた。

数時間後・・・・
「真田班長、修理完了しました。電気付きます！！」
声と同時に機関室に明かりが戻る。
「よし、みなご苦労。次は、漏電警報の原因を調査する。」
そう言うとそれぞれが、配電盤などを確認し始めた。

数十分後・・・・
「おいみんな、これを見てくれ！！」
隊員たちが駆け寄ると、漏電警報装置につながるコードが2本焼き

切れてしまっていた。
「水嶋、この品番のコードはスペア保存してるかな？」
水嶋とは個々の隊員の一人で、在庫確認などの業務を受け持っている。
「これは、舞鶴基地にしかないかもしれませんねぇ。滅多にないもんで。」
すぐに問い合わせます、と言って艦橋へ駆けて行った。

？　艦橋　？
水嶋は艦橋につくと、パソコンで在庫の確認を始めた。
「カタカタ・・・・・・・・」
瞬時に打ち込まれたデーターは、すぐに返された。
「在庫あり―残数２」表示された。
すぐさま基地に連絡を取り、部品を持ってきてもらうことにした。

しばし待つ事１０分・・・・
入口の所で待っていると、ある人物がやってきた。
油断していた水嶋もすぐさま体制を整え、敬礼する。
その相手はもちろん、寺井崎である。
まさか部品を持ってくるのに、艦長が来るとは思っても見なかった。
なぜ、艦長が？と尋ねると寺井崎は、
「いやね、たまたま保管室にいてね連絡を受けたから持ってきただけさ。」
そう言って、寺井崎と一緒に機関室へと降りて行った。

？　第１機関室　？
部品が届いてからの、班長達は早かった。
すでに部品を取り外していたので、つけるだけだった。
ものの２０分程度で、すべて修理してしまった。
「いや～見事なもんだ。真田君、報告書の提出は任せたよ。」

そう言って、また１７７号指令室へと戻って行った。
その後、保守点検を済ませ機関員たちは部屋へと戻った。
真田だけは、報告書を艦橋へ届けてからであるが・・・。
こうして、平凡ながらも色々な事のある毎日を過ごすのであった。

第2章　第2話　「舞鶴の日常～漏電警報～」（後書き）

少々無理な設定もありますが、少々は目をおつぶりください。
それでも、毎回見ていただいている読者の皆様には本当に感謝しております。
今後も、連載スピードは遅いですが頑張っていきますので、
温かい目で見守ってください。
ご意見やご感想お待ちしております。

第2章　第3話　「舞鶴から沓島（くつじま）へ～対領空侵犯対処演習1～」

第2章　第3話　「舞鶴から沓島へ～対領空侵犯対処演習1～」
？　２０１５年５月１５日　８時４５分　？
？　舞鶴港第７バース　？
「出港１５分前！！荷物積み込みを急げ。」
副長の谷が声を張り上げて命令する。
「「「了解。」」」
大勢の隊員が一斉に返事して、テキパキと動き始める。
「さてここは三浦！！積み込み終了したら報告してくれ。」
「了解しました！！」
そう言って三浦は綺麗な敬礼をして谷の後を引き継いだ。
「よし、艦長室へいくかぁ～」
そう言って谷はラッタルを昇って行った。

？　艦長室　？
「えーと、演習の報告書をどこに置いたのかな～？」
寺井崎は出航前なのに、机の上の資料をひっくり返していた。
「確かにおいたはずなのになぁ～、何処だろう？」
ガサガサと報告書を探していると、不意に部屋がノックされた。
「コンコン」
「はい、誰ですか？」
「副長の谷ですが、忙しいでしょうか？」
谷が不思議そうに部屋の前で待っていた。
「いいえ、どうぞ空いています。」
そう言うと谷が「失礼します」と言って入ってきた。
「出港の準備が整い次第・・・、艦長どうされたのですか？」
谷は部屋の乱れを指して言った。
「いやそれがね、演習の報告書がないんだよ。知らないかい？」

「あぁ、もしかして昨日預かったやつでしょうか？それなら部屋に・・」
寺井崎はそう言われて、思い出した。
報告書の承認欄に谷の印鑑が欠けていたので、返却したんだ・・。
「それを持ってきてもらえるかな。」
「はっ、了解しました。」
そう言って部屋を一度出ようとした時、腰に付けた無線が鳴った。
「ピーピー、こちら積載物指揮所。積載完了、指示願います。」
谷は寺井崎を一度窺ってから、無線に返答した。
「こちら谷、出港準備！！乗員の乗り込みを急がせろ、以上閉局。」
「了解しました、出港準備！！乗員の乗り込み急げ！！！」
艦内インカムに切り替わり、艦内に音声が流れる。
「艦長では、そろそろ艦橋の方へお願いいたします。」
そう言って谷は自室へ、寺井崎は艦橋へと歩き出した。

？　２０１５年５月１５日　９時００分　？
？　やくも艦橋　？
「艦長、上がられます！！」
入口付近の海士が艦橋内へ報告をすると、一同が敬礼をする。
「三浦２尉、出港準備状況を報告して下さい。」
「はっ、人員・積載物資のチェック完了しております。出港できます！！」
三浦が報告すると、寺井崎は一度頷いて、インカムを手に取った。
「総員出港用意、舫い放て！！前方見張りを厳となせ！！！」
艦橋があわただしく動き出すと、三浦が復唱した。
「総員出港用―意、舫い放て！！前方見張りを厳となせ！！！」
寺井崎はひとまず、艦橋の椅子に掛けた。
航海長が手際よく指示を出す。
「バウスラスター始動！！左舷側１０度に設定、進路開け次第切れ！！！」

そう言うと、艦がゆっくりと左にスライドし始めた。
「航海長、進路上障害物なし。バウスラスター停止します、指示を！！」
「よし、両舷前進半―速。前方見張り・レーダー監視を厳となせ！！」
今頃ＣＩＣでは、レーダー員がレーダーと睨めっこしているだろう。
１０分程で、湾内から抜け出し日本海側に出た。
「両舷原―速、前方見張り員は艦内へ。レーダー監視は継続せよ！！」
航海長が言うと、三浦が復唱した。
「両舷原―速！！前方見張りは艦内へ、レーダー監視は継続せよ！！」
三浦が復唱し終えると寺井崎は立ち上がり、インカムを手に取った。
「艦長より各員へ。只今をもって、第３哨戒配備を発令する。各部署、
２交代制にて勤務せよ。以上・・・。」
そう言い終わると、寺井崎は一度艦長室へと戻った。
あたごは、海の上にウエーキを残して沓島へと向かった。
そう・・・長い船旅になるとも知らずに・・・・。
これは、その２日前の事である。

つづく・・・・。

第2章　第3話　「舞鶴から沓島（くつじま）へ～対領空侵犯対処演習1～」

ご拝読いただきありがとうございます。
何か気になる表現などがありましたら、是非感想欄のほうでお伝えくだされば とてもありがたく思います。
これからもよろしくお願いします！！

番外編　「登場人物紹介・ＧＰＳ艦船位置」（前書き）

＊ＧＰＳ艦船位置情報システムが更新されました。６／１５現在＊

＊更新日　２０１１年２月２７日＊

番外編　「登場人物紹介・ＧＰＳ艦船位置」

番外編　「登場人物紹介　～新しい人が増えれば更新します～」

［名前］
寺井崎　護
［階級］
２等海佐
［人物紹介］

未婚で、今年３０歳を迎える。
前任は、海上試験艦「あすか」副長。
時に抜群の指揮能力を見せる事が・・・

水谷（みずたに）　猛（たけし）

幕寮長（海将）

海上自衛官のトップに当たる。
階級は海将で、寺井崎に辞令を言い渡した。

今田（いまだ）　雅彦（まさひこ）

３等海佐

寺井崎と同じく、今年で３０歳を迎える。
やくもでは、副長と航海長を務める。

水下（みずした）　恵（めぐみ）

３等海尉

やくもの砲雷長を務める、女性自衛官。
２７歳だが、艦の頭脳的働きをしている。

木村（きむら）　卓（すぐる）

３等海尉

やくも航空科に所属、今年３１歳を迎える。
配属５年目になり、今年から航空科副主任。

河野（こうの）　遥（はるか）

３等海曹

やくも航空科に所属、今年２４歳を迎える。
飛行時は、木村３尉のコパイロットを担当。

松宮（まつみや）　脩平（しゅうへい）

２等海士

今年度採用された、海上自衛官で２０歳。
舞鶴教育隊で、日々訓練に励んでいる。

佐田（さだ）　明（あきら）

２等海士

同じく新採用の海上自衛官で２０歳。
松宮と同じく訓練に励んでいる。

野々宮（ののみやあきら）　明

海将補

留萌基地、基地司令を務める４９歳。
現役時は、Ｐ３Ｃの機長を務めていた。

菅田（かんだ）　勇人（はやと）

海将

舞鶴基地、基地司令を務める５３歳。
現役時は、護衛艦隊司令を務めていた。

谷（たに）　雄二郎（ゆうじろう）

３等海佐

あたご副長を務め、今年で４５歳を迎える。
昼行燈と称されるが、凄い統率力を持つ。

三浦（みうら）　祐輔（ゆうすけ）

２等海尉

あたご船務長を担当、今年２６歳を迎える。

艦橋など、艦内の事務をこなす右腕的存在。

真田（さなだ）　康介（こうすけ）

１等海曹

あたご機関科に所属、今年２６歳を迎える。
機関整備を担当し、２年前から主任を務める。

水嶋（みずしま）　博信（ひろのぶ）

２等海曹

あたご機関科に所属、今年２４歳を迎える。
在庫管理など、事務的仕事をこなしている。

柄本（えもと）　真二（しんじ）

１等海上保安正

第６管区宇和島海上保安部たかつき船長。
今年、４２歳になるがその手腕は見事。
今回不審船事案に対処する。

十和田（とわだ）　賢治（けんじ）

３等海佐

あたごの艦長。
胃潰瘍の手術のため、入院していた。

最終話で、寺井崎と対面した。

福田（ふくだ）　響子（きょうこ）

北海道知事

今年度当選した、北海道知事。
大規模防災演習を企画した。
今年で、３８歳を迎える。

木田（きだ）　恭平（きょうへい）

北海道副知事

数年前からこの立場を確立している。
頭の回転が良く、知事の右腕的存在。
今年で、３５歳を迎える。

白石（しらいし）　兼也（けんや）

札幌市消防局　特別高度救助隊隊長

かれこれ、１０年ほどこの隊に所属している。
後輩の面倒見が良く、慕われている。
年齢は、今年で３６歳になる。

北村（きたむら）　貴広（たかひろ）

札幌市消防局　特別高度救助隊隊員

白石の推薦で、昨年特救隊に入隊。
火災現場での消火能力は、高い。
年齢は、今年２３歳になる。

石堤（いしづつみ）　啓哉（てつや）

新栄丸船長

漁船新栄丸の船長。北海道沖で座礁を起こし、
救助を受ける。面倒見がよく、仲間からも
篤い信頼を受けている。

橋立（はしだて）　新也（しんや）

３等海尉

やくも航空課所属の航空支援員。
確実な仕事と和やか雰囲気で、
仲間からの信頼も人一倍厚い。

天見（あまみ）　恭司（きょうじ）

２等海上保安正

回転翼機の操縦をして、もう１０年・・・。
ヘリの操縦に関しては、第１管区全体でも
トップレベルの技術を誇る。

＞ｉ１９０９２―１３０７＜

番外編　「登場人物紹介・ＧＰＳ艦船位置」（後書き）

登場人物を更新しました！！

ＧＰＳ地図は、５話投稿後に更新する予定です。

（暫し、お待ちください＾＾；）

第2章　第4話　「舞鶴から沓島へ～対領空侵犯対処演習2～」

第2章　第４話　「舞鶴から沓島へ～対領空侵犯対処演習２～」

？　２０１５年５月１６日０時２８分　？

？　あたご艦橋　？

昨日出発したあたごは、２０ｋｔで沖葛島沖を航行していた。

「航行に異常はないか？」

当直責任者の谷副長が艦橋に入ってきた。

昨日第３哨戒配備が発令されてから、２交代制の当直の任についている。

「はっ、異常はありません。艦内各所からも報告はありません！」

同じく当直の任についている２０代の航海科員が答えて、任に戻った。

（今は、零時を回ったところか・・・。）

谷が少し考えていると、三浦が近づいてきた。

「副長、少しお休みになられてはいかがでしょう。艦橋はお任せを。」

三浦は、休憩を提案してきた。

少し考えたが、断る理由がないので素直に受ける事にした。

「わかった。気遣いありがとう、３：００に声を掛けてくれるか？」

「はっ、了解いたしました。」

そう言うと、三浦は艦橋の監視に戻った。

谷もそれを見届けて艦橋を後にした・・・。

？　同日　６時００分　？

？　艦長室　？

航海２日目を迎えた今日は、寺井崎はいつもより少し早く目を覚ました。

その理由は、ある夢であった・・・。

その夢を振り切るために、冷たい水を顔に掛けた。
「冷たいー！！！」
自分が想定していた温度違っていたので、すぐに目が覚めた。
「あっーすっきりした。」
顔を洗い終わると、クローゼットに掛けてある幹部制服に袖を通した。
寺井崎は、椅子に掛けて昨日の報告書をチェックし始めた。
夜などの報告書は、扉のポストに差し込まれている事が多く、当直以外の時の情報を確認するのにとても役立っている。
「えーと、昨日の夜間作業報告はと・・・？」
ほとんど記入される事のない速度変更欄に記入があった。
「えーと、変更時間は３：２５で当直責任者は・・・谷だな。」
そう確認すると椅子から立ち上がり、艦長室を後にした。
？　同日　６時２０分　？
？　艦橋　？
「艦長上がられます！！」
入口付近に立っていた海士が、艦橋に向かって報告した。
「副長はいるか？」
寺井崎が口に出して艦橋を見渡した。
すると、寺井崎に三浦が近寄ってきた。
「ご苦労様です！！副長は只今、ＣＩＣに降りております。お呼びしましょうか？」
「いや、いい。ＣＩＣにいるんだな、艦橋は頼むぞ！」
軽く敬礼を交わして、艦橋を後にした。

？　ＣＩＣ　？
「副長はいるか？」
艦橋と同じような口調で部屋の中に問いかけた。
「あっ、艦長ご苦労様です！」
谷がＣＩＣから出ようとしながら言ってきた。

「谷、少し聞きたい事がある。外で・・・いいか。」
そう言ってＣＩＣの廊下で話を聞いた。
「昨日３時過ぎに航行速度が変更されているが、これはなぜだ？」
寺井崎が質問をぶつける。
「はい、昨日航行に遅れが見られるため、上申を受けて許可しました。」
「上申者は誰だ？」
次に出てきた疑問をぶつけた。
「三浦２等海尉です。当該時刻、艦橋にて指揮をとっていました。」
寺井崎は、疑問がすべて晴れると続いて質問した。
「沓島への到着時刻はどうなっているか報告を頼む。」
「はっ、本日１２００時には当該島へ接岸できる見込みです。」
「了解した、艦の指揮を頼むぞ！！」
「はっ！！」
そう言って寺井崎は、艦長室へと戻った。

？　同日　１１時５５分　？
？　沓島沖５ｋｍ地点　？
「アンカー下ろせ！！　１２３０からの対水上戦闘演習に備えろ！！」
予定より５分程早く、沓島沖に投錨することができた。
今日の午後は、２０ｋｍ離れた目標を確実に攻撃する演習が行われる。
目標は小型艦なので、隊員の練度と精度が試される。
寺井崎は、それなりにこの演習を楽しみにしている。
しかし、寺井崎は今日より明日の方が不安ではあった。
なぜなら・・・、
「・・長、・・・・艦・・長、・・・・艦長！！」
「ああ・・・。」
寺井崎は、三浦にゆすられて我を取り戻した。

「ああ、どうした？」
どうやら、すこしうとうとしていたみたいだ。
寺井崎が聞くと、演習計画を持参してきていた。
「艦長だけまだ拝見していただいていないので、持ってきたのですが・・・。」
「ああ、すまないな。ありがとう、拝見するよ。」
そう言って、演習計画に目を通した。
「演習計画に変更はあるか？」
「いいえ、ありません。」
「そうか・・・。」
会話しているうちに、演習計画に目を通し終えた。
「ありがとう。今の時間は何分かな？」
「はい、えーと１２時１５分です。」
時間を聞くと、準備をしに一度艦長室へ戻って行った。

？　艦長室　？

幹部制服を正し、ＪＳ　ＡＴＡＧＯと刺繍された部隊帽を深めに被った。
「よし、行くか！！」
自分なりに気合を入れ、ＣＩＣへと向かった。

？　ＣＩＣ　？

ＣＩＣに入ると慌ただしく科員が動き回っていた。
時刻はちょうど、１２時２５分を指していた。
「砲雷長、演習準備状況を報告して下さい。」
「はっ、ほぼ準備が完了したと報告が上がっています。」
「ほぼとは？」
砲雷長が口にした「ほぼ」という単語に反応していた。
「えーと・・・ですね、目標配置に行った隊員が戻れば完了です。」
報告を淡々と受けていると、準備完了の報告を受けた。

「よし、それでは対水上戦闘演習を行う！！」
寺井崎の掛け声とともに、レーダー員から状況報告が入る。
「１２３０時、対水上レーダーに感！！　方位９０度、相対距離１５０００ｍ。」
報告と共に寺井崎は手元のインカムに手を伸ばした。
「水上戦闘用意！　対水上見張りを厳となせ！！」
同時に砲雷長へ武器の選定を命じた。
「主砲戦闘用意！！　目標方位９０度、相対距離　１２０００！！」
砲術士と電測士が連携を取りながら目標の位置を合わせていく。
「主砲戦闘用意よし！！発射方式を手動モードに設定、準備よし！！」
砲術士が手元のハンドガンタイプの発射機を手に取った。
艦は、右へ回頭しながら攻撃準備を整える。
回頭を合図に砲雷長が指示を出す。
「１２８ｍｍ主砲、撃ち―方始め！！」
「撃ち―方始め！！」
砲術士が復唱し、発射機を奥に押し込んだ。
「ドーン、ドーン、ドーン・・・」
重い音が艦内にも響き、数発の砲弾が目標に向かって飛翔する。
「１２８ｍｍ主砲、撃ち―方止め！！」
「撃ち―方止め！！」
砲術士が、発射機を元の位置に戻す。
砲弾はその間も、目標に向けて飛翔を続ける。
はじめに発射された砲弾が、目標に降り注ぐ。
「バーン！！！！！」
何かが爆発するような音が遠くで聞こえた。
水上レーダーを確認すると、目標が破砕したようである。
念のために、ＳＨを飛ばして確認すると確かに、目標の破砕が確認できた。
つまり、水上戦闘演習はひとまず成功を収めた。

寺井崎は安堵のため息を一度つき、艦長室へ戻った。
その寺井崎は、ＣＩＣにある資料が置き忘れられていた。
「対領空侵犯対処マニュアル１」
端的にそう書かれていた・・・。

つづく

第2章　第4話　「舞鶴から沓島へ～対領空侵犯対処演習2～」（後書き）

更新が遅れてしまって、本当にスイマセン。
お楽しみにしていただいていたようで、とてもうれしい限りです。
更新が少し遅れ気味ですが、辛抱強く書いてまいりますので
応援よろしくお願いいたします。
新作品の執筆も考えていますので、そちらも投稿されればご覧ください。

第2章　第5話　「対領海侵犯対処～前編～」

第2章　第5話　「対領海侵犯対処～前編～」
？　２０１５年５月１７日　２時２７分　？
？　あたご　艦長室　？
「・・・・・・・・！！」
寺井崎は、夢の中から目を覚ました。
時刻は丁度２時３０分前、丑三つ時の時間帯であった。
「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・」
荒い息を吐きながら、ここが現実だと言い聞かせた。
「・・・・夢・・か。」
寺井崎は、ベッドから降り顔を洗いに洗面所へ向かった。
艦長室には、お風呂と一緒に洗面所も備え付けられている。
まぁ、艦長の特権といったものだろうか。
・・話を戻そう。
「バシャ、バシャ・・・」
水の流れる音が徐々に緩まり、寺井崎も落ち着いてきたようだ。
ベッドに再び戻り、一度落ち着いて夢を思い出した。
「これで・・４度目だぞ・・・。」
そう、寺井崎はこの夢を見続けているのだ。
なにかを、予言するかのように・・・。
「まぁ、何も起きなければいいけどな・・・。」
不安があったが、もう一度寝ることにした。

？　同日　３時００分　？
？　ＣＩＣ　？
「・・・・・・・！？」
一人の電測員が、ＣＩＣのレーダーと睨めっこしている時であった。
領海ぎりぎりを航行する船舶を確認したのだ。

不思議に思った電測員は、一応艦橋へ連絡を入れた。
「・・ＣＩＣより艦橋どうぞ。」
「・・艦橋です、何かありましたか？」
応対したのは、当直の任に就いている航海士であった。
「副長が居られれば、ＣＩＣへ来て欲しいと伝えてもらえますか？」
「はい、了解いたしました。」
そう言って無線が閉じられた。
数分後、谷副長がＣＩＣに入ってきた。
電測員は、敬礼をしながらもレーダーのモニターに目をやった。
「副長、領海ぎりぎりに不審な船があるのですが・・。」
「どれだ？」
谷もモニターに目線をあわせる。
「これです。」
電測員が、不審船を指でさす。
「確かに、ちょっと変だな～」
和やかな副長の口調が、若干濁った。
「そこの君、ちょっと艦長を起こしてきてもらえるか？」
そう言って谷が指さしたのは、近くにいた海士であった。
「はい、了解しました。」
その海士も、促されるまま艦長室へと向かって行った。

？　同日　３時０３分　？
？　艦長室　？
丁度、眠りに就いた時刻であった。
誰かが、艦長室をノックした。
「はい、誰ですか？」
そう聞くと、ＣＩＣで副長が呼んでいるという事であった。
「分かった。服を着たらすぐ行くと伝えてくれ。」
そう言って、海士を持ち場へ戻らせた。
寺井崎もクローゼットから服を取り出して着替えると、

急いでＣＩＣへと向かった。

？　ＣＩＣ　？

「谷、何があったんだ？」

身支度を済ませた寺井崎が、ＣＩＣの扉を開けて入ってきた。

「はい、領海付近に不審な船があるのですが・・・。」

「どこだ？」

先程と同じように寺井崎が尋ねる。

「ここです。」

寺井崎は船の位置を確認すると、通信長を呼んだ。

「通信長、今すぐ総監部と通信を結べますか？」

「はぁ、まぁ～結べますけど・・・。」

「すぐにつないでくれないか？」

「了解しました、こちらにお繋ぎしますか？」

「そうしてくれれば助かる。」

そう話すと、通信長はＣＩＣの端末を使って舞鶴に通信を試みた。

「ＤＤＧ１７７－ＡＴＡＧＯより舞鶴地方総監部へ。」

３時過ぎなので繋がるのに時間がかかるかと思ったが、案外早く繋がった。

「こちら舞鶴地方総監部通信科、田中２尉です。何かありましたか？」

通信科の田中２尉に状況を伝えると、基地司令が無線に出た。

「寺井崎君、この件は念のため防衛省に報告する。貴艦は燃料補給後、

当該海域付近のパトロールに移ってくれ。現時点を持って、訓練は延期する。」

状況を受けた寺井崎は、了解の意を伝え総員起こしにかかった。

「総員起床！！」

インカムで艦内に、副長の声が響いた。

３時過ぎではあったが、総監部の命では動かないわけにいかない。

「繰り返す、総員起床！！　総員第２哨戒配備に着け！！！」
副長の声と共に、就寝していた隊員達が目を覚まし、持ち場に走っていく。
寺井崎は総員がそろい始めたのを見計らって指示をとばす。
「沓島の給油施設を用いて、あたごの給油を急げ！！給油が終わり次第、
　本艦は出港して現場海域付近の警らに移る！！」
しかし、あたごはあくまでもパトロールが目的である。
不審船が領海に侵入すれば、海上保安庁の管轄になる。
国土交通省から、防衛省へ応援要請が入らなければ実質的行動に移る事は
出来ない事になっている。
しかし、不審船が最近活動を強めている北朝鮮という可能性も含めて、
現場海域の警らについておくのだ。
まぁ、今頃海上保安庁の巡視船が現場海域に向かっているだろう。
事態があまり大ごとにならない事を、ただ願うばかりであった。
しかし、寺井崎の不安は的中してしまう事になる。
その、不安要素が・・・。

？　２０１５年５月１７日　１５時２６分　？
？　兵庫県沖３５ｋｍ沖　？
今朝の状況について、続報が艦に届いた。
朝を待って、Ｐ３－Ｃが飛ばされ航空写真を撮影した。
状況からみるとまだ、領海を侵犯している様子はない。
しかし海上保安庁の船舶はまだ到着しておらず、
いつ侵犯してもおかしくないということであった。
しかし、間もなく海保の船舶が当該海域に到着するという事である。
本艦も当該海域に後、４時間程度で到着できそうであった。
その間も、第２哨戒配備のままである。

そうこうしている間にも動きがあった。
不審船から、不明な電波が発信されている事を確認したらしい。
この艦がつくころには、状況が何か変化しているかもしれない。
何もない事を祈りながらも、あたごは当該海域へと向かって行った。

？　同日　１６時３６分　？
？　？？？？？？？？？？？？？？？？？　？
「艦長、攻撃機器の点検完了しました。」
下っ端であろう男の報告を受けて、次の指示を出す。
「よし、本日２２時に日本国領海に侵入する！！
　接近する船舶は、攻撃対象として扱え！！」
「「「了解！！！」」」
そう言って、その船のエンジンは一度切られた。

第2章　第5話　「対領海侵犯対処～前編～」（後書き）

現場へ向かっている海上保安庁の船舶は、
第６管区「たかつき」・第７管区「ほうおう」・第７管区「あそ」
３隻。
海上自衛隊からは、
舞鶴地方隊所属「あたご」・Ｐ３－Ｃが現場海域へむかっています。

前話で出てきた、「対領空侵犯対処」はどうしたの？という方がいらっしゃると思います。
その話は、申し訳ありませんが第３章へ先送りとさせていただきます。
あしからず、ご了承ください。
話の中で、不明点・疑問点があれば些細なことでも結構ですので、感想欄にてお知らせください。
よろしくお願いいたします。

第2章　第6話　「対領海侵犯対処～後編～」

第2章　第6話　「対領海侵犯対処～後編～」
？　２０１５年５月１７日　１９時３５分　？
？　不審船事案当該海域　？
予定していた時間通り、当該海域へ到着した。
既に、第６管区海上保安部所属の「たかつき」が現着していた。
あたごもそれに続いて、当該海域の警備に移る。
寺井崎は、最悪の状況も想定して艦内に命令を下す。
「本艦は、当該海域へ到着した。現在発令中の第２哨戒配備から、
　総員に第１哨戒配備を発令する。繰り返す・・・」
艦内に寺井崎の声がこだまする。
第１哨戒配備が発令されて間もなく、Ｐ３－Ｃから最新情報が入った。
「情報によりますと、不審船の甲板上にミサイル発射機らしきものが
　確認されたとのことです。その他、４４ｍｍ機銃が装備されている模様！！」
通信長が報告内容を読み上げていく中、寺井崎が「たかつき」と通信を
つなぐよう指示した。
通常、海上保安庁と海上自衛隊は管轄が違うので周波数も違う。
しかし、こういう事態に備え周波数が整えられているのだ。
「艦長、繋がりました。」
通信長の声と共に、通信用の受話器に手をかけた。
「ご苦労様です、あたご艦長の寺井崎です。」
受話器から、重みのある深い声が流れてきた。
「６管保安部所属たかつき艦長の柄本です。ご苦労様です。」
「いえ、Ｐ３－Ｃからの情報なのですがミサイル等の兵器が搭載されている

ようでして、もしもの時は本艦にお任せ下さい。」
寺井崎は、Ｐ３－Ｃからの情報をたかつきにも伝えた。
「わかりました、もしもの時には貴艦にお任せします。迎撃練度の高い
イージスさんを信用します。乗員の命を預けます。」
「了解しました。本艦にお任せ下さい、では！！」
そう言って、通信はとじられた。
それと同時に艦内に向かって下命した。
「艦長から各位へ！対空・対水上見張りを厳となせ！！」
その指示と同時に、艦橋から数人の見張り員が増員される。
夕方を過ぎ、辺りは薄暗かったが暗視型の見張り台が設置されているので
それほど苦にはならなかった。

？　同日　２１時３５分　？
？　不審船内部　？
「おい、日本の領海には何隻の船がいるんだ！！」
艦長らしき男が、レーダーを監視している男に問いかける。
「見た限りでは、２隻の様です。」
そう返答すると艦長らしき男は、「そうか・・・今何分だ？」
「はっ、２１時３５分であります！！」
「よし、持ち場に戻れ！！」
「はっ！！！」
そう言い残して、再びレーダーを監視し始めた。

？　あたごＣＩＣ　？
「不審船に変化はないか？」
寺井崎が、電測員に問いかける。
「はい、今のところ変化は見られません。」
「そうか・・・。」

そう言って寺井崎は、中央付近に置かれた海図の前の椅子に腰かけた。
寺井崎は、正直心の中で震えていた。
そう、自分の見た夢に何処となく似ているからだ。
しかし、その夢通りには進んで欲しくないものだ。
なぜなら、夢の通り行けばこの艦は沈むのだから・・・。

？　同日　２２時００分　？
？　不審船内部　？
「艦長、時間です。」
「うむ、ハープーンミサイル発射用意！！」
「了解！！」
諸元入力され、甲板の発射機から勢いよくミサイルが打ち出される。
それと同時に、高速で機関が始動し始めた。

？　あたごＣＩＣ　？
「艦長、不審船から高速飛翔物２確認！！高速でたかつきに近づく！！！」
電測員の報告より早かった。
「対空戦闘用意！！シースパロー攻撃始め！！！　通信長、総監部に緊急連絡！！」
寺井崎の声と同時に、艦内が慌ただしくまわり始める。
「シースパロー発射準備よし、シースパロー発射！！！」
前部甲板から勢いよく、２発の対空ミサイルが打ち出された。
「目標へ順調に飛翔、接触まで５８秒！！」
「迎撃後、たかつきと合同で不審船を追跡する。」
寺井崎が、艦内に矢継ぎ早に指示を飛ばす。
そうしている間にも、ミサイルは目標へと向かう。
「インターセプト５秒前・・・スタンバイ・マークインターセプト！！」

「ドーン！！！！！」
激しい音が艦外で響き渡る。
「目標１発迎撃、残弾１発さらにたかつきに接近！！」
電測員の非情な声がＣＩＣに響く。
「１２８ｍｍ主砲及びＣＩＷＳ迎撃始め！！たかつきに当てさせるな！！！」
「ウィーン、ドン！ドン！ドン！・・・・・・・」
前部と後部に備えられた主砲が一斉に火を噴いた。
そのうちの数発が、目標をかすめていく。
たかつきにさらに迫った時、
「ドーン！！！！！！！！」
耐えきれず爆発した。
寺井崎が、たかつきに被害等の確認を急がせる。
「艦長、たかつきより報告。先程の戦闘で被害はなし！！」
「よし、わかった。たかつきに通達、不審船の追跡を開始する。」
「了解！！」
寺井崎は、間髪をいれず艦内に再び指示を出す。
「総員戦闘配置を発令する！！対空、対水上見張りを厳となせ！！！」
こうして、不審船との戦いが今始まった。

？　２０１５年５月１７日　２２時１０分　？
？　第６管区海上保安部たかつき船内　？
「こちらは日本国海上保安庁です。前方の不審船ただちに停船しなさい！！」
これを先程から、日本語・英語・中国語・朝鮮語で繰り返されている。
しかし、既に私達の船は攻撃を受けたのだから正当防衛での攻撃も良いの
だが、６管本部から許可が下りない。既に対処不能という事で、国

交省にも
防衛省への移管上申をしているのだが・・・。
そう愚痴をこぼしている間に、６管から連絡が入った。
「６管よりたかつき、正当防衛における射撃を許可する。繰り返す・・・」
ついに、６管から射撃の許可が下りた。
「前方の不審船に告ぐ、ただちに停船しない場合攻撃を実施する・・・」
しかし、それでも止まろうとする気配はない。
「１２．７ｍｍ機関砲、威嚇射撃始め！！」
船長の声で、機関砲が撃ちだされる。
この様子は記録の為、船上部のカメラで撮影される。
「ダダダダダダダダダダダダ・・・・・・」
しかし、一向に止まろうとしない。
「仕方ない、船体に照準！！撃ち方はじめ！！！」
「ダダダダダダ、ダン！　ダン！ダン！・・・・・」
数発が命中するが、一向に止まらない。
この船で、不審船を食い止めるには力不足か・・・。

？　あたごＣＩＣ　？
「艦長、たかつきが射撃を開始した模様です。」
見張り台からの報告が、刻々と伝えられる。
しかし、現段階で防衛省への移管要請が入っていない。
そのため、攻撃を加える事が出来ないのである。
「くぅ、早く移管要請を出してくれれば・・・。」
もどかしい気もあったが、その状況を見守るほかなかった。
それにしても、不審船はそれほど速くはなかった。
そうはいっても、３４ノットは出ているだろうが・・・。
「タタタタタタタタ、ダン！ダン！ダン！　・・・・・」
先程とは違う機関砲の音が聞こえた気がした。

そこに艦橋の見張り員がＣＩＣに入ってきた。
「艦長、たかつきが不審船より砲撃を受け機関に損傷！！これ以上の、
　追跡は不可能です。」
たかつきが攻撃を受け機関に被害を負った。
これで、たかつきは最高速で追跡が出来なくなった。
どうしたものか・・・。
少し寺井崎は考えて、通信長に伝えた。
「通信長、総監部に射撃の許可を取れ。それと、たかつきの救援も！！」
「了解しました。」
しばらくして、総監部から威嚇射撃の許可は下りた。
しかし、船体射撃の許可は下りなかった。
「１２８ｍｍ主砲、手動モードにて威嚇射撃を行う。警告始め！！」
航海科員がマイクに向かって警告を発する。
「前方の不審船に告ぐ、ただちに停船しない場合攻撃を実施する・・・」
しかし数回の警告にも停船をしようとはしない。
「１２８ｍｍ主砲手動モード、撃ち―方始め！！！」
「ドン！ドン！ドン！ドン！・・・」
数発の砲弾が打ち出されると、海面に水柱ができた。
「ただちに停船しなさい！！」
航海科員が繰り返し警告を発する。
少し間合いがあいた所で、再びミサイルが襲ってきた。
今度は、前より距離がない。
「対空戦闘、主砲・ＣＩＷＳ迎撃急げ！！！」
「ドン！ドン！ドン！ドン！・・・」
主砲の音がＣＩＣにも響く。
「正面９０度よりミサイルさらに接近、距離２３００ｍ！！！」
電測員の声が悲鳴に近くＣＩＣに響いた。

「ドン！ドン！・・・・バーン！！！！」
衝撃波が伝わり、寺井崎は転びそうになった。
「おっと。」
なんとか持ちこたえ、ＣＩＣの海図の角をつかむ。
いつまで続くのだろうか・・・。

？　２０１５年５月１８日　２４時３０分　？
あれから１時間近く追跡を続け、遂に不審船は領海外に抜けた。
したがって、警備行動は終わりを告げた。
不審船から１０発のハープーンと機関銃掃射を受けたが奇跡的？被害は
軽微であった。
６管本部のたかつきは、エンジン部の損傷が激しく６管に曳航される予定だ。
しかし、これほどの攻撃にもかかわらずこちらからの攻撃は、
１２８ｍｍ主砲による威嚇射撃７５発のみである。
終始、船体への射撃許可は下りなかった。
あたごは警備行動を終え、舞鶴港へ帰港する。
それと同時に、寺井崎の帰還も早められる事になった。
入院していた艦長の傷が思ったより浅く、明日退院するらしい。
あたごはこの後、ドックで点検を受けることになっている。
寺井崎は、ＣＩＣの椅子に腰かけたままうつらうつら夢の世界へ入って行った。

第2章　第6話　「対領海侵犯対処～後編～」（後書き）

小説を見ていただきありがとうございました。
次回で、第2章あたご編の最終回とさせていただきます。
続編の、第3章もご期待ください。
ありがとうございました。

第2章　最終話　「不審船事案のあと～留萌への帰還～」

第2章　最終話　「不審船事案のあと～留萌への帰還～」
？　２０１５年５月１８日　１２時００分　？
？　舞鶴地方総監部庁舎　基地司令室　？
寺井崎は、海上警備から帰還したあと基地司令室へ来ていた。
今回の不審船事案の報告と引き継ぎを行うためだ。
「コンコン」
扉をノックすると、「開いてるよ」と言われた。
「失礼します！！」
扉を開けて中へ入ると、基地司令と幹部制服を着た一人の男性がいた。
「まぁ、掛けたまえ。」
促されるまま、応接椅子に腰かけた。
「・・・・・・」
静かな空気を破ってしゃべり始めたのは、基地司令の菅田であった。
「先に紹介しておこうか、隣にいるのがあたご艦長の十和田君だ。」
「この度はご迷惑をおかけしました。十和田　賢治３佐です。」
菅田に続いてしゃべり始めた声は、案外軽そうな物であった。
「いえいえ、寺井崎　護２佐です。」
自己紹介を終えて、気が軽くなった寺井崎は報告を始めた。
「まず、不審船事案の報告は報告書の通りですが・・・。」
報告書を手に説明を始めた。
「つまり、攻撃はあちら側からで正当防衛によるものでいいですね？」
「はい、間違いありません。６管にもご確認いただければと思います。」
そう言って、報告書をパタンと閉じた。
「では、離任式を始めます。」

「寺井崎２佐、ご苦労様でした。留萌への帰還を許可します。」
「はっ、了解いたしました。有難うございました！！」
寺井崎は室内で立ち上がり、敬礼をした。
菅田も敬礼をして、寺井崎は部屋を後にした。

？　同日　１３時００分　？
？　舞鶴基地第１運動場　？
「懐かしいな・・・。」
寺井崎は、ほんの１８日前の事を懐かしく思い出していた。
初めは、あがってしまった事を思い出していた。
そして、また同じ場所で今度は別れを告げなければいけない。
そう決心して、朝礼台の上に立った。
「え～、１８日間という短い時間でしたがお世話になりました。
復帰した艦長のもとで、訓練に励んで下さい！！
僕自身、色々な経験をさせていただき、とても有意義でした。
留萌へ帰っても、この経験を生かせるよう頑張ります。
あたご隊員の皆さん、有難うございました！！！」
寺井崎は後半、目に涙を浮かべていた。
短い間でも、愛着は湧くという事だ。
挨拶が終わって、敬礼をすると数名の隊員が泣いていた。
それにつられて泣きそうになるのを堪えて、笑った。
（最後の顔が泣き顔って言うのは良くないよな・・・。）
内心、そう思ったからである。
庁舎の陰に入ったところで、地面に数滴の水が落ちた。
寺井崎にとって、良い経験になった１８日間でした・・・。

？　同日　１６時２５分　？
？　旅客機内　？
予定よりも１３日早い帰還となった寺井崎であったが、
内心少し不安な気持ちがあった。

留萌の仲間達は、大丈夫だろうかなどだ。
チェックインする前に買った新聞を開きながらそう思った。
その新聞の見出しは、今朝の不審船事案の事であった。
「北朝鮮、日本領海内に侵入か！？　海上保安庁巡視船たかつきに発砲！！」
たかつきの被害状況等が、刻々と記されていた。
それに引き換え、あたごに被害がなかったのは良かった事だ。
これも隊員の熟練のなせる技だろうと、内心思っていた・・・。

第2章　最終話　「不審船事案のあと～留萌への帰還～」（後書き）

これで、第2章が完結しました。
次に短編を挟み、3章へ入りたいと考えっています。
もしかすると、短編がとぶかもしれません・・・。
3章は、また留萌へ戻ります。
懐かしい顔ぶれにご期待ください。

第3章　第1話　「落ち着くな～留萌は・・・。」

第３章　第１話　「落ち着くな～留萌は・・・。」
？　２０１５年５月２０日　７時２０分　？
？　留萌地方総監部庁舎　？
寺井崎は、舞鶴への派遣終了後、２日間の休養が与えられていた。
その休養後、久しぶりにこの基地に足を踏み入れた。
入り口ゲートの所で、警衛に声を掛けられた。
「寺さん、お久しぶりです。どうでしたか、舞鶴は？」
「いや～、大変でしたよ。不審船とか・・・。」
「あれって、寺さんの担当だったんですか。お疲れ様です、どうぞ。」
世間話をして、入り口のゲートを通された。
こうして基地を歩くのも、２週間弱ぶりだろう。
懐かしい顔に、何名かすれ違う。
庁舎に入ろうとしたところで、水下が後ろから駆けてきた。
「寺井崎２佐、出張ご苦労様でした！！」
相変わらず、元気が取柄で隊内のムードメーカー的役割を担っている。
「久しぶりだね。何か、いない間変わった事あったかな？」
「いえ、特にありませんでした。訓練も順調でしたし・・・。」
「そうか・・・。」
寺井崎はひとまず、変わりがない事に安心し庁舎内に入っていった。
受付で、預けていたＩＤカードを受け取るとひとまず、更衣室へ向かった。
予備の幹部制服に着替えるためである。
（いつも着ている制服は、クリーニング中です・・・。）
幹部制服に袖を通すのも、２日ぶりだ。
服を着替えると、ひとまず基地司令室へ向かった。

？　同日　７時４５分　？
？　基地司令室　？
「寺井崎、入ります。」
軽くノックして、寺井崎は部屋に入った。
そこには、基地司令の野々宮さんが椅子に腰かけていた。
「海将補、お久しぶりです。寺井崎、本日留萌に帰還しました！！」
「お疲れ様でした。舞鶴で、何か得るものはありましたか？」
菅田は、ねぎらいと同時に質問もしてきた。
「はい・・・、やはり練度はあたごに敵いませんね。やくもの隊員も、
あたごに負けぬよう、もっと練度を鍛えようと思いました。」
「そうですか・・・。それは、良い経験が出来て良かったですね。」
「はい・・・。」
話終えた寺井崎は、室内の敬礼をして部屋を後にした。

？　事務室　？
普段来る事のないこの部屋に来たのは、出張の報告を済ますためだった。
「はい、これにサインして下さい。」
事務担当から差し出された書類に名前を書いて印鑑を押す、
これを2・3回繰り返すと、事務からＯＫが出た。
「ご苦労様でした！」
軽くねぎらわれて、部屋を出て行った。

？　海上自衛隊埠頭　？
前にも言った事があっただろうか・・・？
ここ留萌自衛隊基地は、陸上自衛隊も駐屯している。
そのため、広大な土地のため慣れるまで苦労する事になる。
・・・話が逸れてしまった・・・。

「潮風が気持ちいいな～。」
風にのった潮の香りが、寺井崎の鼻を刺激する。
見慣れた場所に出た所で、また水下と一緒になった。
「お疲れさん。やくもへ行く所かい？」
「はい！！そうです。」
そう交わすと、一緒にやくもへ向かった。
やくもは、相変わらず立派に存在していた。
あたごとはまた違うやくもに、愛着を感じ始めていた。
「水下は、やくもが好きか？」
寺井崎は、ふと浮かんだ質問を水下にぶつけた。
「やくもをですか・・・。はい、もちろん好きですし隊員のみんなも好きです！！」
「それは良かった。」
正直、寺井崎は安堵していた。
嫌いとか言われても困るし、好きなら好きで返答にも困る。
まぁ、好きならいいか・・・。
そう、自分の中で締めくくり艦長室へ入って行った。

？　２０１５年５月２０日　９時１０分　？
？　ＣＩＣ　？
停泊中の艦船でも訓練は行われる。
その中でも頻繁に行われるのが、防火訓練である。
８年前、当護衛艦群しらねが火災を起こし、ＣＩＣ全損の被害があった。
いざという時の為にも、連携を図る事が一番の目的だ。
「ブーブーブーブー・・・」
艦内に低いブザー音が響く。
それに次いですぐに、指示が飛ぶ。
「第１機関室より出火！！応急部署を発動する。・・・」
指示を聞いた隊員達が、ラッタルを駆け下りる。

「第１応急隊、吸水管設置！！第２応急隊、消火開始！！・・・・」
本番さながら、怒号が飛び交う。
しかし、訓練もやはり気休めでしかない。
本番に敵うものなど、ないのだから・・・。
そうこうしている間にも、火が消し止められた。
現場からＣＩＣに報告が入る。
「現在時、第１機関室を鎮火。残火処理も完了、指示を乞う。」
ＣＩＣでは寺井崎がストップウォッチのＳＴＯＰを押した。
「１３分２１秒！！！」
鎮火までの時間を読み上げた。
「前より、３分弱早くなってるな～。よしよし・・・。」
鎮火までに時間をかければかける程、艦を危険にさらす。
時間短縮は、海上自衛隊内でも練度を要する一つになりつつある。
それを、さらに短くできれば安全にもつながるのだ。
寺井崎は、内心でそう思いながら副長に書類提出を命じ、
艦長室での職務に戻って行った。

留萌での勤務は落ち着いているが、緊張感が少し欠けている。
実際の戦闘になった時、この状態はまずい。
寺井崎は、士気の度合いに若干の不安を持ちながらも今日の終業を
迎えた。
しかし、数週間後思いがけない事で出港する事になるとは、
誰も思いもしなかった。
そう、あのできことがあるとは・・・。

第3章　第1話　「落ち着くな～留萌は・・・。」（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。
ここまで物語を書けているのも、一重にみなさんのおかげです。
次回掲載前に、この物語のあらすじを投稿しようと思います。
もう一度ストーリーを大雑把に理解していただくと、
読みやすくなるかと思います。
また、物語中でご不明な点や質問があれば・・・
感想コーナーでどんどん投稿してください。

第3章　第2話　「よく晴れた日」

第３章　第２話　「よく晴れた日」
？　２０１５年６月１日　６時３０分　？
？　やくも艦長室　？
寺井崎は、部屋で久しぶりに新聞をめくっていた。
今日の９時には、訓練に出港するのでひと時の休息だ。
定番の新聞の一面を飾っていたのは、やはりあの記事だった。
「日本の領海を侵犯した中国人船長を公務執行妨害で逮捕！！」
この事件は昨日、尖閣諸島近辺をパトロールしていた１１管区海上保安部の
巡視船「くだか」に体当たりして逃走しようとしたところを逮捕された。
くだかは、定点カメラで撮影しており、証拠として国交省へ提出した。
国交省は、外務省に連絡を取り中国への謝罪を求めている所だ。
「大変だな～」
寺井崎は、のんびりとした口調で呟きながら新聞を閉じた。
椅子から立ち上がると、一度伸びをしてまた腰かけた。
今度は、机の引き出しから訓練計画書を出してきた。
実をいうと、今度は自衛隊の訓練ではない。
北海道で直下型地震が発生した時の、大規模防災演習に参加するのだ。
なんでも、今年就任した知事が決めた事らしい。
自衛隊の他には、海上保安庁、北海道警察、札幌市消防局、
北海道医師会などが参加している。
やくもは、北海道沖を航行しておくと言う事しか伝えられていない。
詳しい想定は、明日現地で実際に説明されるそうだ。
隊員達も初めての試みに、皆緊張を隠せないようだ。

・・・少し艦内でも見回ってくるか・・・・。
寺井崎は、部屋を後にした。

？　艦橋　？

「艦長、上がられます！！」
全員が入口の方を向き、敬礼をする。
「あ、いいよ。出港作業を続けて・・・・。」
寺井崎が促すと、敬礼していた手が下がり職務に戻っていく。
「船務長、出港準備の方はどうなっている？」
寺井崎は、三浦に近づきそう聞いた。
「はい、準備の５０％が終了済みです。」
「そうか・・・・。」
「ところで、副長はどこにいるか知らないか？」
先程から気になっていたが、今田の姿が見当たらない。
「副長でしたら、機関科の真田の所へ行ってますけれども・・・・。」
（真田・・・真田・・・、この前の整備主任か。）
自分の中で括りをつけ、艦橋を後にした。

？　機関科　整備主任室　？

「コンコン」
不意に、扉は数回ノックされた。
「はい、どうぞ。」
真田は、事務整理をしながら応答した。
「ご苦労さん。副長がこちらにお邪魔していると聞いたのだが・・・・。」
「ガタ！！！」
真田は、椅子から勢いよく立ちあがったので大きな音が立った。
「艦長！！どうされたのですか？」
あまりに急な訪問だったので、冷静な真田は慌てた。
「いや、副長が来ていると聞いたのだが。」

「副長でしたら、先程ＣＩＣへ行くと言っていましたが。」
「そうか・・・、すまなかったな。職務を続けてくれ。」
「はっ、了解しました。」
ほんの数分で、寺井崎は主任室を後にした。
「・・・事務整理するか・・・。」
真田は、再び机に向かった。

？　２０１５年６月１日　１０時３０分　？
？　北海道庁　小会議室　？
ここ北海道庁では、明日の防災演習に向け最終会合が行われていた。出席しているのは、知事・副知事・危機対策局の幹部職員数名である。
「では、明日の防災演習の会合を行います。」
副知事が話を進める。
一応紹介しておこう・・・。
北海道知事・副知事は、福田響子・木田恭平である。（詳細は、人物紹介参照）
話を戻す・・・。
「では、危機対策局！災害の想定を報告してくれ。」
危機対策局の職員が、椅子から立ち上がり話し始める。
「はい、では中央のモニターをご覧ください。」
言うのとほぼ同時に、中央のモニターに映像が映し出された。
「えぇ今回の想定は直下型地震で、マグニチュードは７．０と想定します。
震源は、北海道内陸部で最大震度は７、余震も予測されます。」
知事は、手を顔の前に組んだまま言った。
「続けて。」
「今回は、いかに早く要救者を確保し搬送できるかで変わると思われます。
また、北海道の救急指定病院の６０％以上が耐震化していません

ので、
現実病院の倒壊の危険性が非常に高いです。病院機能が失われた場合機能
するのが、護衛艦です。今回は、洋上待機中の「やくも」に要救者と医師を
派遣し、洋上での救命措置を試みます。以上が、今回の想定です。」
言い終わると、職員は再び椅子に腰かけた。
「危機対策局のみなさん、ご苦労様でした。」
知事が、そうみんなを労った。
「それでは、明日の開始１２時にここ同庁に集合する事！！以上。
解散！！」
解散といったが、副知事の木田だけ呼び出された。
「木田君、この書類を関係各位にＦＡＸしてくれ。」
そう言って手渡したのは、手書きの書類であった。
中身を軽く読むと、明日の各方面ごとの想定が詳細に書かれていた。
「これは・・・。」
「あぁ、さっき手書きで仕上げたものだ。字が汚いがな。」
福田が謙遜を言いながら、手を軽く振る。
「いえいえ、全然大丈夫です。すぐに送信します！！」
そう言って部屋を出ようとした時、福田が呟いた。
「これが、災害の時に生かせればよいのだが・・・。」
「知事、何か言いましたか？」
小さい声だったので、木田が聞き返すとなんでもないと言って向うを向いた。
木田は、少し首をかしげながら部屋を後にした。

？　同日　１１時３５分　？
？　北海道沖１５ｋｍ　？
あの後、ＣＩＣでやっと副長に会う事が出来た。
副長に渡す書類があったのだが、どうやら部屋へ忘れたようだ。

結局、出港後艦長室へ出頭するように促して別れた。
積み込みが終わると、明日に備え洋上へ出港した。
今日の午後は、対空戦闘演習が行われる予定だ。
洋上へ出ると、防火訓練や戦闘演習が行われるのが通例だ。
果たして、演習も大規模防災演習も上手くいくのだろうか。
この時点では、誰にもそれは分からなかったが　よく晴れた日だった・・・。

第3章　第2話　「よく晴れた日」（後書き）

更新が遅くなってすみません。
少し次も遅れるかもしれませんが、
温かい目で見守ってください。
感想・ご意見お待ちしています。

第３章　第３話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　前編」

第３章　第３話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　前編」
？　２０１５年６月３日　７時００分　？
？　やくもＣＩＣ　？
「ＤＤＨ１８２より留萌総監。現在、沖合１５ｋｍ地点を２５ノットで航行中。」
やくも通信士が、定時連絡を留萌総監部へ報告する。
「留萌総監よりＤＤＨ１８２。了解しました、航行を続けて下さい。」
留萌総監からの返答を聞くと、ひとまず安心だ。

今日は、昨日より通告があった防災演習が実施される予定だ。
昨日、留萌を出港したやくもは、沖合で演習を行っていた。
演習を実施している最中に、直下型地震が発生したという想定である。
この想定を把握しているのは、寺井崎と副長だけである。
したがって、他の科員はなにも知らないのだ。
果たして、実際の災害を想定して行動できるのか・・・。

？　艦長室　？
寺井崎は、昨日送付されてきた計画要綱に目を通していた。
「想定震度は、７・・・津波は・・なしか・・・。」
呟きながら、一か所一か所確認していく。
「今回のやくもの仕事は、津波の観測及び要救者の搬送だな。
航空科にも、通達しなければいけないな。後で、航空科長を呼ぶ・・と。」
どうやら、今回はヘリが最大限に活用されそうである。
日頃の訓練の成果をみせてくれると思うが、なぜか不安が頭を過っ

た。
なにも、不安な要素はないはずなのに・・・。
？　同日　８時３０分　？
？　札幌市消防局　？
ここ札幌市消防局では、演習に向けて装備品の再点検が行われていた。
「ホース・・・良し！！酸素ボンベ・・・残圧良し！！」
隊員達が、装備品の点検を一つ一つおこなっていく。
機関員は、消防車両の点検をおこなっているところだ。
「ウーーーゥ・・・・・」
サイレンアンプが鳴らされ、正常に動作している事を証明する。
しかし演習当日でも、他の災害は待ってくれない。
その証拠に・・・、
「ピピピピピピピピ！一般救急指令。中央区北五条西７丁目・・・」
出場指令を受け、準備を整えると消防署から出て現場へ向かった。
「ホント、救急出場多いよな～」
愚痴のようにこぼしたのは、特別高度救助隊隊長の白石であった。
「ホントですね。減ってくれれば、いいんですけど・・・。」
それに答えたのは、昨年入隊したばかりの北村である。
特別高度救助隊が発足した大きな理由として、阪神淡路大震災の教訓がある。
この部隊は、政令指定都市を中心に１９か所に設けられている。
「それにしても、演習上手くいくのかな～。」
「やってみなきゃ分からんでしょう。」
白石と北村が会話していると、また指令が入った。
「ピーピーピーピー！交通救急救助指令。中央区西十九条９丁目・・・」
指令が入るとともに、白石と北村は駆けだし出場準備を始めた。

２分足らずで準備を済ませると、車両に乗り込み現場へ急行した。

？　北海道庁　知事室　？

福田は、席に座って今日の想定をもう一度確認する作業をしていた。
詳細な想定では、本日１２時１５分に道内陸を震源とするＭ７．０の地震が発生。
道庁は直ちに関係各所へ通達を行うと同時に、危機対策管理室を設置し、
被害状況の収集・対策に当たる。
また、今回の地震で全体の過半数の救急指定病院の機能が喪失。
傷病者を診察する、診察室を各避難所に設置し、重病者はヘリコプターにて、
海上待機中の「やくも」へ緊急搬送する予定である。
道警察・札幌消防では、倒壊した建物内部から要救者を捜索し救助する予定だ。
また、今回は津波襲来の予定は特に立てられていない。
「ざっと、こんなものか・・・。」
資料を机に置いて、一度一息ついた。
「はぁ～。上手くいくのだろうかな？なんせ、初めてだからな。」
独り言を呟いていると、木田がお茶を持って入ってきた。
「知事、お茶が入っていますけど飲まれますか？」
「あぁ、頂こう。すまないな～。」
「いえ。」
木田が福田にお茶を差し出すと、忠告を入れる前に飲んでしまった。
「熱っつ！！」
女性とは思えない声だが、言おうとする前に飲むもんだから・・・。
「知事、大丈夫ですか？」
「大丈夫なわけないだろう！！」
そう言うと、手近にあった水を飲み干した。
本当に、大丈夫かな・・・？

？　２０１５年６月３日　１１時３０分　？
？　やくもＣＩＣ　？
「開始まで、後１時間ほどだな。」
寺井崎は、呟きながら目の前の海図に目をやった。
やくもは、北海道沖１５ｋｍ地点を２５ノットで航行中だ。
ＣＩＣには、常時１０人は必ず詰めている。
今は、副長もＣＩＣに待機している。
３０分後に、このＣＩＣの大画面に知事からの挨拶が映る予定だ。
他の科員は、交代で昼食を取っている。
航空科は、今ヘリの整備で手いっぱいだろう。
「あぁ～、早く時間にならないだろうかな。」
「どうしたんですか、艦長？」
声を掛けてきたのは、砲雷長の水下だった。
「いや～、なんか不謹慎だけど楽しみなんだよな。」
「確かに、こんな事滅多にないですからね～。」
水下が話していると、通信長が紙を持って入ってきた。
「艦長、留萌総監から演習の詳細が届きました。」
持ってきたのは、詳細な演習経過書であった。
「ありがとう。あっ、通信長インカムを回してくれ。」
「はい、どうぞ。」
「ありがとう。」
寺井崎は、インカムを受け取ると経過書を開封した。
そして、艦内に向け放送を始めた。
「艦長より総員に告ぐ。
本艦は、１２１５より北海道で発生した大規模災害への対処を行う。
航空科は、１２１５よりＳＨ－６０１を発艦させ状況の確認を行う。
その後、道庁からの要請でＳＨ－６０１、６０２を避難所へ急行

させ、
傷病者の緊急搬送を行う。
搬送後、札幌港に入港。接舷し、消防局・警察の援助に向かう。
今回の、想定は以上だ。質問があれば、寺井崎の所まで出頭。以上。」
寺井崎は、インカムを元に戻すと一度艦長室へ戻った。
鉄帽と作業制服に着替えるためだ。
少しずつ、準備が整ってきたようだ。

？　同日　１２時００　？
？　北海道庁前　？
そして、いよいよ演習の準備が整った。
間もなく、火蓋が切って落とされる。
それは、福田だけでなく皆同じだろう。
果たして、上手くいくのだろうか・・・？

第3章　第3話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　前編」（後書き）

果たして、初めての試みはどうなるのでしょうか？
前のように、ヘリのトラブルがなければいいですけどね・・・。

ご意見やご感想、お待ちしております。

第３章　第４話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　中編」

第３章　第４話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　中編」
？　２０１５年６月３日　１２時００分　？
？　北海道庁前広場　？
「続いて、福田知事よりお話しがございます。」
呼ばれると同時に、壇上に上がるとマイクを手に取った。
「皆様、本日は暑い中お集まりいただき有難うございます。
今日は、晴天とは行きませんでしたが無事、開催する事が出来ました。
さて、今年度よりこの防災演習を行う事になった経緯をご説明いたします。
北海道庁で調べた結果、北海道内の救急指定病院およそ６０％が震度６強の
揺れに耐える事が難しいという結果が出ました。
この事を受けまして、自衛隊・警察・消防・医師会・道危機対策局で協議
した結果、今回の大規模防災演習をおこなう事になりました。
普段より、このような演習を行う事で反復を重ねまして、実際の災害の際に
十分な実力が発揮され、道民の財産・安全が確保できればと思います。」
そこまで言い切ったところで、会場の広場から拍手が沸き起こった。
「いいぞ！！」「さすが、福田知事！！」など様々な声が沸いている。
「有難うございます。
今回の報告を受けまして、救急指定病院の耐震化を行っている所です。
この事に関しましても、道民の皆さんのご理解を頂けます事をお

願いします。
　それと、想定に関してはこの後、副知事の木田より説明があります。」
そう言いきると、壇上で深々と礼をして、壇上から降りた。
会場には、また大きな拍手が沸き起こっていた。

？　やくもＣＩＣ　？
「艦長より総員に達す！！本艦は、１５分後シーホークの緊急発艦を実施する。
　総員に現在時を持って、生存者救助部署準備態勢を発令する！！
　各員、持ち場配置につけ！！！　以上。」
知事からの挨拶が終わったところで、寺井崎は艦内に令をとばした。
今回津波は発生しない予定であるが、海上監視も役割の一つである。
先程の令を受けて、航空科員たちは緊急発艦の為の準備をしているだろう。
「さぁ、準備は整ったかな・・・。」
寺井崎は呟きながら、８８式鉄帽の顎紐をきつく締め、救命胴衣の前を閉めた。
「砲雷長、ＣＩＣは任せたぞ。」
「はっ、了解しました。」
敬礼をして、寺井崎は扉から出て行った。
？　札幌市消防局　？
白石は、消防局の椅子にかけて想定を見直していた。
「俺らはこの後・・・」
ＦＡＸされてきた用紙２枚を両手に持ち、交互に見比べる。
「本隊は、消防局にて被災。その後、札幌ピーチホテルを現場に見立て、
　救助作業を行う。なお当ホテルは、昨年倒産し道管理とされている。
　市の職員が実際に、強度に影響がないよう一部瓦礫が破砕してい

る。
　なお、進入後人命検索を行う・・・。」
一人でブツブツ呟きながら、復唱を繰り返す。
復唱が終わると、用紙を机に置き伸びを繰り返した。
「あぁ、時間的にはもうすぐだな・・・。」
時間が、１５分に迫っていた・・・。

？　２０１５年６月３日　１２時１５分　？
？　札幌市内　？
「３・２・１・ウ―ウ―ウ―ウ―ウ―ウ―・・・」
札幌の街にサイレンの音が鳴り響く。
中心街のディスプレイには、「防災演習開始！！」か映し出される。
その文字もすぐに、「緊急地震速報」に切り替わった。
緊急地震速報とは、震度５強以上の揺れが予測される場合に発令される。
速報のあとに、ディスプレイがＮＨＫのニュースに切り替わる。
「只今、北海道を震源とする非常に大きな地震が発生しました！！
　詳しい震度は、情報が入り次第お伝えします。繰り返します・・」
ＮＨＫ北海道のキャスターが、想定文を繰り返す。
街を行き交う人も立ち止って、ディスプレイを見ている。
その横を、数台の消防車が通り過ぎる。
「ウ―ウ―ウ―カン、カン、カン！！・・・・」
消防車のサイレンが、街にこだました。
いよいよ、演習が始まった。

？　やくも艦橋　？
寺井崎は、ＣＩＣを出た後、艦橋で指揮を取っていた。
そこに、通信長が駆けこんできた。
「艦長、留萌総監から緊急電！！　１２１５時、北海道で大規模な災害発生！！

本艦に海上偵察の命令が入りました。」
通信長が持ってきた通信文を寺井崎は、複読する。
寺井崎は、インカムを手に取り艦内に令した。
「艦長より、総員に達す！！　先程１２１５時、北海道で災害が発生した。
ついて、現在時を持って生存者救助部署を発令する。
シーホークは、緊急発艦の用意！！海上偵察を開始する。」
艦内にサイレンが流れ、副長が復唱する。
後部格納庫では、慌ただしくシーホークの発艦作業が行われる。
数分立たずに、艦橋に発着艦指揮所から連絡が入る。
「ＬＳＯから艦橋！！　ＳＨ－６０１の発艦準備完了。発艦許可を願う！！」
「艦長よりＬＳＯ。発艦を許可する！！」
許可を出すと、艦橋にいてもヘリの飛び立とうとする音が聞こえる。
「バラバラバラバラバラバラバラ・・・・」
ヘリからでる風が、護衛艦を小さく揺らす。
「ＳＨ－６０１よりやくもへ。これより海上偵察を開始する。」
シーホークからの通信に、通信長が答える。
「やくもよりＳＨ－６０１へ。了解、画像の転送を願います。」
「ＳＨ－６０１、了解しました。画像を転送します。」
通信を一度切ると、回線を通してヘリからの画像が映し出される。
寺井崎は、タイミングを見計らい通信長へ指示を出す。
「通信長、ＳＨ－６０１を帰還させて下さい。燃料補給後、道内へ向かわせます。」
「了解しました。」
通信長は、シーホークの周波数に合わせ指示を伝える。
数分後、ヘリの羽音が近づいてきた。
そのタイミングで、ＬＳＯから着艦許可を求める上申が行われた。
「ＬＳＯから艦橋。シーホークの着艦許可を願う。」
「艦橋、了解しました。着艦を許可します。」

「ＬＳＯ了解。速度を、２０ノットまで減速されたい。」
「艦橋了解しました。」
ＬＳＯからの指示で、艦の速度が少し落とされる。
「速度、ふたじゅー！！」
航海科員の声が、艦橋内に響く。
艦橋から見える海原は、とても静かだった。

？　２０１５年６月３日　１２時２６分　？
？　札幌ピーチホテル敷地内　？
ここ札幌ピーチホテルでは、警察・消防・医師会の本部が設置されている。
白石ら特別高度救助隊も、この後建物内部の検索を実施する。
合同本部には、何人が被災しているのか現時点では伝えられていない。
つまり、救助側からすれば実戦と変わりないのである。
「第２隊集合！！今から、ブリーフィングを実施する。」
白石が、自分の隊を召集し始めた。
「本隊は、１階裏口から進入する。正面玄関は地震の影響で通れない。
なお、内部は煙幕で視界が非常に悪く、酸素も薄い。
したがって、面体など完全着装で進入する。ここまではいいか？」
隊員達が一様に頷いた。
「要救助者の数は現時点では把握されていない。
なお、酸素残圧が少なくなったら一度館外へ退避もやむを得ない。
これで、ブリーフィングを終了する。１２３５時に館内進入を開始する。
準備にかかれ！！」
白石の合図で、隊員達は救助車両に戻り装備を装着する。
全てをフルで装備すると結構な重量になる。
やはり、日頃の鍛錬がものを言うのだと思う。

？　同日　１２時３５分　？
？　札幌ピーチホテル裏口前　？
「中央９０１から合同本部。現在時、建物内へ進入を開始する！！」
白石が、行くぞ！！と声を出して扉を開けた。

？　札幌ピーチホテル１階　？
内部はひどい有様だった。
煙幕による煙が充満しており、視界が非常に悪い。
白石は、装備しておいたライトを自分の前に照らす。
それと同時に、隊内専用の無線のスイッチも入れ指示を出す。
「隊長より各隊員へ。これより３名１組で１階部の捜索を行う。
北村・東本は俺と南側、野田・巣鴨・清水は北側を捜索だ！！」
指示を出すと、隊員達はそれぞれ別れ検索を始めた。
「北村・東本、左右に広く散らばって捜索するぞ。」
そう言うと、北村と東本は白石を間に挟み散開した。
外から見ると大きくないの、中は物凄く広く感じた。
どの部屋にいるのか分からないので、一室一室チェックしていく。
まだ、検索は始まったばかりであった。

？　同日　１２時４０分　？
？　ＳＨ－６０２機内　？
「ＳＨ－６０２よりＬＳＯへ。これより、災害合同本部へ急行する。
伴って、発艦許可と発艦管制を要請する。」
ＳＨ－６０２の操縦士である、木村がＬＳＯへ要請を始めた。
その間にも河野は、機器のチェックを済ませる。
「ＬＳＯよりＳＨ６０２へ。発艦を許可します。風は微風、発艦可能。」
木村は端的に了解、と伝えて操縦席に座り直した。
「河野、準備はいいか。発艦するぞ！！」

「はい！！」
青と赤の誘導灯を持った管制官が、左と右の手を交互に上下させる。
その合図と共に、ヘリが少しずつ上昇を始める。
やくもの上部付近まで上昇した所で、ヘリが少し傾き前進を始める。
「河野、やくもへの通信を開け。」
「はい。」
返事を返すと、周波数をやくもに合わせ直した。
「ＳＨ－６０２よりやくも。応答願いたい、どうぞ。」
河野の声に少し遅れて、返答が返る。
「こちらやくも、ＳＨ－６０２どうぞ。」
「現在、災害対策本部の救難指令に基づき現場急行中。無線開局願う。」
「やくも、了解しました。無線開局します。」
無線の開局手続きを済ませると、次は災害対策本部に周波数を合わせた。
「やくも所属ＳＨ－６０２より、災害対策本部。応答願いたい。」
「こちら災害対策本部。無線感度良好、こちらへの到着予定を知らされたい。」
河野は、木村の方を向いて内容を合図する。
「大体、２５分程だ。」
「そちらへの到着は、１３０５時予定。以上、ＳＨ－６０２。」
「災害対策本部了解。」
河野は、全ての無線手続きを済ませると前に向き直った。
ヘリから見る景色は、いつもと変わりない青い空と海だった・・・。

第３章　第４話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　中編」（後書き）

更新が遅くなってしまいました。
本当は、前後編で終了しようと思ったのですが・・・
思ったより内容が膨らんだので前中後編に変更しました。

ご意見やご感想をお待ちしています。

第3章　最終話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　後編」

第３章　最終話　「大規模防災演習ｉｎ北海道　後編」
？　２０１５年６月３日　１２時５０分　？
？　北海道ピーチホテル２階　？
「隊長より野田。応答されたい。」
一階部検索の結果、要救助者の存在は確認できなかった。
中央階段を通り、二階部の検索を行っている。
「ガガガ・・・、こちら野田。どうぞ。」
「要救助者の有無と酸素残圧はどうか、どうぞ。」
白石らは酸素残圧に余裕があるが、野田の方はどうだろう？
「ガガ・・、要救助者は確認できず、酸素残圧は大丈夫です。」
「了解した。引き続き、要救助者の捜索を続けられたい。」
「了解しました。」
無線を肩に掛け直すと、ライトで再び前を照らし直した。
「誰かいませんか～！！」
北村が、所々で声をかけまた面体を装着する。
このホテルは元々、１６階建ての建物である。
既に、８階から上階は１隊が捜索に入っている。
しかし、依然と要救助者発見の無線は入っていない。
何処にいるのだろうか？
救助に慣れているはずの隊員達も、若干の焦りが襲う。
そこに一報の無線が飛び込んできた。
「災害対策本部より捜索作業中の各隊員へ告ぐ。
　ホテル名簿によると、５名の詳細が不明である事が判明。
　内、２人が女性である。発見次第、一報入れられたい・・。」
ここで、要救助者の数が判明した。
（女性が含まれているのか・・・。）
白石は、捜索作業を急ぐことにした。

？　同日　１２時５５分　？
？　やくも艦橋　？
「両舷微速、投錨用意。沖合にて、停船する。」
寺井崎は、副長に指示を出した。
「両舷微ー速、投錨用ー意！！　沖合にて停船する。作業部署の発動を急げ！！」
副長の指示で、艦内が慌ただしく動き始める。
艦の速度が、２０ノットから１０ノット以下まで落とされる。
そこに、シーホークから通信が入ってきた。
「ＳＨ６０２よりやくも。後１０分程で、災対本部へ到着する。帰署時の、受け入れ体制の準備を具申する。」
「やくもよりＳＨ６０２。現在本艦は、沖合に投錨準備中。現地到着次第、一報願いたい。以上、やくも。」
河野は、了解と告げて周波数を戻した。
ヘリは、もうすぐ北海道内に入ろうとしていた。

？　札幌ピーチホテル２階　？
先程より、少し煙幕が薄れたと思ったらまた濃くなってきた。
「誰かいませんか！！」
北村が、面体を外して呼びかける。
すると、
「・・・・助・・・・け・・・て・・・・・・」
かすかに、女性の声が聞こえた。
白石達は散開して、周囲の部屋を探し始めた。
「・・助け・・・・・て・・・・」
声の部屋に白石が到着し、部屋を慎重に開ける。
建物全体の電源が落ちているので、頼りはハンドライト一本だけだ。
少しずつ前を照らしていくと、人影が現れた。
「大丈夫ですか！！」

白石が駆け寄って、女性を支える。
女性に面体を装着させると、煙の比較的少ない階段付近へ避難した。

「あなたの名前を教えて頂けますか？」
白石が、階段に着き女性を落ち着かせると名前を聞いた。
「は・・い、吉・・中・・・佐代・・里です。」
「吉中佐代里さんで間違いないですね。」
女性は、弱々しく頷く。
「ちょっと待っていて下さいね。」
白石はそう言うと、無線を手に取り周波数を合わせる。
「中央９０１より捜索中の各隊員宛、２階にて要救者一名確保。
名前は、吉永佐代里。至急、応援願いたい。
場所は、２階中央階段付近。どうぞ！！」
少し間をおいて、返答が帰ってきた。
「災対本部より、中央９０１宛。面体着装の自衛隊員がそちらへ急行中。
他の隊員も含めて、２階中央階段付近へ集合させられたい。
なお、８階より上捜索中の隊員より緊急入電があり、要救助者５名の内
３名を確保したとの連絡あり。ボンベ交換後、引き続き捜索に当たれ。
以上、災対本部。」
無線によると、上の隊員達も要救者を確保したようだ。
残りは一名だ。何処いるのだろうか・・・。
「中央９０１了解。」
端的に告げて、無線周波数を小隊に変更した。
「隊長より各隊員へ・・・・」
そう言おうとした時、緊急を知らせる無線音が鳴り響いた。
「北側捜索野田より、隊長宛。要救助者を発見。救出を試みた所、
男性が突然倒れた！！酸素マスクを着装させ、階段へ急行中。

至急、指示を乞う！！」
何と、一名が実際に倒れたようだ。
「隊長より野田。至急階段へ集合せよ！！他の隊員へも厳命、以上。」
返答を聞く前に、災対本部へ緊急連絡を取る。
「至急、中央９０１より災対本部！！もう一名の要救者を発見。
しかし、要救者の意識がない模様。至急、搬送の手配を要請する。」
無線を入れた所で、北側の隊員達が階段へ到着した。
「どうしたんだ！！」
白石が、野田達に尋ねると野田が答えた。
「どうやら、煙幕の主成分を多く吸い込んだようですね。
早く搬送しないと、危険かもしれません・・・。」
状況を把握した白石の判断は早かった。
「北村、かばんから簡易担架をだせ！！搬送するぞ！！」
男性を担架に乗せると、残りの隊員を待機させ下り始めた。
「もう少しで、外に出られますから・・・頑張って下さい！！」
白石と北村は、階段を駆け下りていった。

？　同日　１３時０４分　災害対策本部　？
白石からの緊急連絡を受けた災対本部は、慌てていた。
演習で、実際の要救者が出るとは思わなかっただろう。
そこに一報の無線が飛び込んできた。
「やくも所属ＳＨ６０２より災対本部。応答願いたい。」
緊急搬送訓練の為、急行していたヘリが到着したのだ。
「こちら災対本部。ＳＨ６０２どうぞ！！」
「間もなく、災対本部へ到着する。着陸指示を願う。」
「災対本部、了解。」
ヘリの無線を受けて、応急手当をして病院へ搬送する事になった。
また、慌ただしく本部内が動き始める。

ヘリの羽音がだんだんと低くなってきた・・・。

？　札幌ピーチホテル１階　裏口付近　？

階段を下っている途中、緑色の服とすれ違った。

階段を出し得る最高速で降りて、裏口を目指した。

白石は、先程の要救者に呼吸器を渡したのでボンベを持っていない。

「（少し苦しいな。早く外へ出ないと・・・。）」

白石は、最高速で裏口を蹴り飛ばした。

少し薄暗い雲が、白石の気持ちを代弁しているようであった。

外へ出た白石は、そのまま救護所へ直行した。

？　救護所　？

白石は、土足のまま救護所へ駆け込んだ。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・要救者をお願いします！！」

息を切らしながら、白石自身も酸素ボンベを渡される。

大きく息を吸い込むと、思い切り噎せた。

「ゲホ、ゲホ、ゲホ・・・」

「白石さん、大丈夫ですか！？」

「あぁ、なんとか大丈夫だ。」

そうこうしている間に、手当を済ませヘリで搬送されようとしていた。

「（助かってくれよ・・・。）」

白石は、心の中でそう呟いた。

？　同日　１３時１０分　ＳＨ６０２機内　？

木村と河野は、コックピットで待機していた。

その間にも、河野は緊急案件をやくもへの報告を済ませていた。

「木村さん、要救助者搬入完了！！離陸準備整いました。」

後ろに乗っている隊員が、扉を閉めながら報告する。

プロペラの回転数が徐々に上がっていく。

一気に上昇すると、白石中央病院を目指した。
木村はいつも以上の集中力で、安定させつつ高速で移動した。
数分足らずで、病院のヘリポートへ到着した。
「ヘリダウン、ヘリダウン、ヘリダウン、もう少し、ストップ！！」
ヘリが、病院のヘリポートに着陸する。
ヘリから担架が運び出され、要救助者が病院の中へと消えていった。
木村と河野達は、報告を済ませるとそのまま帰署した。
札幌の街を出ると、また蒼い海が広がっていた。

？　同日　１８時００分　？
？　札幌市内　？
「ウーウーウーウー・・・・」
始まりと同じサイレンが、札幌の街にこだました。
札幌ピーチホテルでも、あのトラブル以外は順調に進み、
無事、終了を迎えていた。
道庁前では、知事がお礼を込めた挨拶をしている。
やくもはと言うと、ＳＨ６０２の帰署を待ち、留萌港へ入港した。
余談だが、緊急搬送された要救者は無事命を取り留めた・・・。
こうした日頃の積み重ねが、いざという時に役に立つ・・・
本当にそうだと実感する事になるのは、この演習の１月後のことであった。
まさか、あのような事になるとはだれが想像しただろうか・・・。
まだ何も知らぬ、寺井崎たちは留萌で束の間の休息を得た。

第3章　最終話　「大規模防災演習・ｉｎ北海道　後編」（後書き）

ここまで読んでいただきましてありがとうございます。
作者の、ＳＨＩＲＡＮＥです。
ここまで読んでみて、いかがでしたでしょうか？
自分は、表現するのが苦手な面もあるので、
上手く伝わらないということもあり得ます・・。
何か疑問やご意見がありましたら、またお願いします。

それと、２つの理由から少し更新をしなかったり遅れるかもしれません。
１つは、今年高校受験のため。
２つは、他の作品の執筆にも力を入れたい。
この２点からです。

ご迷惑をおかけするかもしれませんが、よろしくお願いします。
それでは、お体に皆さん気をつけて！！
また会いましょう。

第４章　第１話　「雨降る留萌」

第４章　第１話　「雨降る留萌」
？　２０１５年６月１５日　８時２０分　？
？　海上自衛隊第１埠頭前　？
防災演習からおよそ２週間たった今日、埠頭は慌ただしかった。
やくもは定期訓練へと向かうため、出向準備に追われていた。
「出港４０分前！！！　出港準備急げ～！！」
副長の声が、インカム越しに埠頭に流れる。
その声に駆り立てられるように、隊員達は駆けて行った。
「ご苦労様。出航準備の方は、順調にいっていますか？」
そこへ、寺井崎が総監部への報告を終えて帰ってきた。
「はい、順調に進んでいます。このまま行けば、予定通りに・・・・。」
「そうですか、僕は艦橋に行きますので何かあればそちらに・・・・。」
「はっ、了解しました。」
寺井崎はそう告げると、手近の扉から艦内へ入って行った。
今田は、手に付けた防水の時計で時間をもう一度確認する。
「８時２２分か・・・・。」

？　同日　８時２６分　？
？　やくも艦橋　？
「艦長入られます！！」
入口付近の海士が、艦橋内へ向かって報告する。
その声と同時に、艦橋内の全員が行動を止めて入口を向いて敬礼をする。
「ご苦労様。出港準備を続けてください。」
その言葉を聞くと、各々が自分の仕事に戻る。

艦橋に入った寺井崎はまず、気象長にこれからの天気を確認する。
「今日の天気ですが、南西の風が強く昼から雨が降るらしいです。」
「雨ですか・・・。波高の方はどうですか？」
「はい、少し高く3メートルぐらいと予測されます。」
「わかりました。持ち場へ戻ってください。」
天気を確認すると、気象長を持ち場へと帰す。
「昼から雨で、波高が3メートルか。今日は、哨戒配備のままかな・・・。」
天候が悪くなると、どうしても視界が悪くなるが、護衛艦には高性能なレーダーがある。しかし、通常監視ではカバーできない点もある。
数年前に起きた漁船衝突は天候ではなかったが、
レーダー監視や引き継ぎの行き違えで発生したものである。
「まぁ、後で副長達と協議して考えるか・・・。」
寺井崎は、帽子を被り直してＣＩＣへと向かった。

？　同日　８時３５分　？
？　やくもＣＩＣ　？
ＣＩＣでは、各種レーダーなどの調整と点検が行われていた。
「水下いるか～？」
寺井崎は、後で艦長室へ来るように伝えるためＣＩＣを訪れていた。
「艦長、砲雷長はただいま席を外して居られます。」
近くにいた3尉を呼び止めて聞くと、そう言われた。
「そうか・・・。じゃあ、後で艦長室へ来るように伝えて貰えるかな？」
「はい、そういう事であれば喜んで。」
「じゃあ、頼んだよ。」
そう言い残すと、艦長室へと戻った。

？　同日　８時４１分　？

？　艦長室　？
艦長室へ来る間に、数人の士官とすれ違った。
士官達は皆、敬礼をしてくれたのでそれに敬礼を返す形だ。
寺井崎は艦長室にＩＣカードを通すと、室内へと入った。
室内は片付いていて、同年代の部屋と比べるとその差は歴然だ。
室内に入った寺井崎は、椅子にかけてノートパソコンを立ち上げた。
「えーと、ポチ・ポチ・ポチ・ポチ・っと。」
パスワードを打ち込みデスクトップに出ると、一つのファイルを開いた。
ファイル名は「演習実施要綱」と書かれていた。
「一番新しい日付は・・・あった、これだ。」
最近では、電子化が進みあらかたの書類はサーバー提出されるようになった。
今回の演習実施要綱の作成担当者は、確か水下だったはずだ。
文書ファイルを開くと、文字が綴られた報告書が画面に現れた。
「今回の演習の種類は・・・全部やるのか・・・。」
今回の演習では、１週間かけて全ての訓練を実施するらしい。
具体には、対水上・対空・対潜戦闘・遭難者捜索訓練なども含まれる。
「まぁ、詳しい打ち合わせは砲雷長と副長が来てからにするか・・・。」
そうこうしている間に、出港の時間が迫っていた。
「おっと、のんびりしすぎたな。艦橋へ急がなければ。」
寺井崎は、パソコンをシャットダウンすると、制帽を被り部屋を後にした。
？　同日　８時５５分　？
？　やくも艦橋　？
「出港５分前。出港用意！！最終チェックを急げ～。」
今田の声が、艦内へと響く。
その声に続いて、若い士官が復唱する。

寺井崎は艦橋に入るとまず、艦長席から双眼鏡を手に取った。
今田も寺井崎を見つけると、近寄ってきた。
「出港準備の状況はどうなっている？」
「はい、間もなく全ての準備が完了します。」
「そうか・・・。」
１分程すると、準備完了の連絡が入った。
寺井崎はインカムを手に取り、艦内へ向けて令した。
「舫い放て！！出港、両舷前進微速！！！」
舫いが放たれると、アンカーも上がり艦が少しずつ進み始めた。
岸壁から脱した所で、また令した。
「両舷前進半速、取舵５０度！！」
艦が出口を向いたところで、航海長に操艦を移した。
寺井崎は艦長席に掛けて、一息ついた。
艦は、留萌港を出ると礼文島に向けて進路をとった。
出港して少しすると、予報通り雨が甲板を打った。
やくもは少しずつ、留萌の町を離れて行った・・・。

第４章　第１話　「雨降る留萌」（後書き）

更新が遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。
受験の方も無事終わり、４月からはいよいよ高校生です。
更新の方も見てくれる人がいる限りは、書き続けたいと思いますので、
これからも応援よろしくお願いします。
また、よりよくしていくという意味でも、感想やご意見をお待ちしています！！

第４章　第２話　「強風、濃霧、そして大雨」

第４章　第２話　「強風、濃霧、そして大雨」
？　２０１５年６月１５日　１０時２３分　？
？　やくも第３区画廊下　？
「タッタッタッ・・・」
砲雷長の水下は、艦長室へ走っていた。
１０時２５分から会合があるのに、今日に限って・・・
「今日に限って、なんで時計が止まるのよ～！！」
走りながら、そう叫んだ。
艦長室へ向かう途中に、数人の下士官とすれ違った。
みんなも私を見ると、立ち止まって敬礼をしてくれる。
しかし時間に焦っている私は、走りながら敬礼をしている。
艦長室の部屋をノックしたのは、１０時２６分の事であった。

？　同日　１０時２６分　？
寺井崎は、コーヒーを飲みながら副長の今田と話していた。
「それにしても、水下来ませんね・・・。」
「来ませんね～。何かあったんでしょうか？」
そう話している時に、部屋が不意にノックされた。
「はい、誰ですか？」
そう尋ねると、一呼吸置いて返事が返ってきた。
「遅れて申し訳ありません。水下入ります・・・。」
そう言い終わると扉が開いた。
「ご苦労様です。走ってきたのですか？」
水下は、息を整えてから返事をした。
「はい、すみません。時計が止まっていまして・・・。」
「まぁ、席に掛けて下さい。コーヒーは、ブラックですか？」
寺井崎は水下を部屋に通すと、席に座らせた。

「はい、ブラックで結構です。」
コーヒーをカップに入れて、水下の前にそっと置く。
「ありがとうございます。」
コーヒーを飲んで気を落ち着けると、寺井崎から資料が手渡された。
題名には、「定期演習実施要綱」と書かれていた。
今回作成したのは、私こと・・・水下　恵であった。
「え～では、１ページ・・・は飛ばして５ページを開いて下さい。」
水下は内容を思い出しながら、ページをめくっていく。
「まず最初に予定している、対領空侵犯対処について確認します。」
領空侵犯は、絶対に許されるべきことではない。
イージスの後ろ盾には、多くの国民の命がかかっているのだ。
それに、北海道はロシアから近く一時期は領空侵犯も後を絶たなかった。
最近は、若干落ち着き気味ではあるが・・・気を抜いてはいけない！！
水下は資料を見ながら、そう思っていた。
「訓練実施は、翌０９００からで問題はないですか？」
「はい、とくにないです。」
「私も同感ですね。」
寺井崎の質問に、今井と水下が答える。
「ダメコンは、どう組み込みましょうか？」
水下は、計画を練ってはいたが重要なところは空けておいたのだ。
「そうだな・・・右舷機関室にハープーン１発命中ってところかな。」
「そうですね・・・その位が妥当じゃないでしょうか。」
こんな風にして、演習実施要綱が確認されていった。
全ての確認と摺り合せが終わったのは、１時間後であった。
「それでは、これで演習実施要綱の確認を終えます。」
ご苦労様でしたと言って、寺井崎が立ち上がる。
軽く挨拶をすませると、水下と今井は制帽を被り直し艦長室を後に

した。
外はまだ、激しい雨が甲板を打っていた。
？　同日　１０時３５分　？
？　やくもＣＩＣ　？
水下はＣＩＣに戻ると、自分のデスクに置かれた書類に目を通した。
今後の天候の変化や、ここ2時間の海域の変化などだ。
天候の事を詳しく知りたくなった水下は、手近の艦内無線を艦橋に繋いだ。
「艦橋、樋上2士が承ります。」
「砲雷長の水下だけど、気象長をＣＩＣに呼んでくれるかな？」
艦橋で出たのは当直の若い士官であった。
「はっ、了解しました。すぐに手配します。」
「宜しく。」
そう言って、艦内無線を元に戻した。
ＣＩＣの中は、沢山のディスプレイに海図が映し出されていた。
数分すると走ってきたのか、気象長が到着した。
「砲雷長、およびでしょうか？」
「あぁ、ご苦労様。今後の天気を詳しく教えて欲しいんだけど・・・。」
「了解しました。今日は風速が強く、濃霧になるかもしれません。
明日以降は天気が戻りそうですが、風力はそのままのようです。」
「そうですか・・・ありがとう。持ち場に戻ってください。」
そう言うと、気象長はＣＩＣから出て行った。
再び書類に向き直ろうとした時、ＣＩＣの扉が勢い良く開いた。
入ってきたのは通信長で、何か慌てている様子だ。
「通信長どうしたんですか？そんなに慌てて。」
「たった今・・・周辺海域で・・救難信号を受信しました。」
「場所とかは分かっているのですか？」

そう言いながら、目の前の海図に目を移す。
よく見ると、小さく点滅している船舶があった。
船名は・・・第三新栄丸、漁船だ。
「海士！！　至急、艦長を呼んできて。」
手近にいた海士にそう言うと、すぐにＣＩＣから出て行った。
「通信長、至急　第一管区海上保安部に緊急通報！！」
「はっ。」
通信長も海士に続いて、ＣＩＣから出て行った。
「西村、第三新栄丸に救難マークを付けて！！」
「わかりました。」
西村がカタカタと入力して、新栄丸にマークがついた。
艦内がにわかにあわただしくなってきた。
「（どうか、無事でありますように・・・。）」
水下の願いを他所に、雨は一段と激しさを増していた・・・。

第４章　第２話　「強風、濃霧、そして大雨」（後書き）

更新が遅くなりまして、申し訳ありませんでした。
東日本の大震災から、早くも１か月が経ちました。
現地では復興の兆しが見えたと思ったら、また余震・・・。
被災された皆様が、早く日常を取り戻されますよう遠くからではありますが、
祈っております。

定期演習に向かっていたやくもに突如飛び込んだ、救難信号。
一体、このあとどうなってしまうのだろうか？
続きを、期待しないでお待ちください。

最後になりましたが、読んでいただきまして本当にありがとうございます。
更新頻度が遅くなりつつありますが、これからも宜しくお願いいたします。

第４章　第３話　「雨の救難信号」

第４章　第３話　「雨の救難信号」
？　２０１５年６月１５日　１０時２３分　？
？　やくも第３区画廊下　？

救難信号の受信を受けて、艦内は慌ただしかった。
やくもがいる海域は風雨が激しく、すぐに海保が到着できないらしい。
それに伴って、第１海上保安本部から要請を受け捜索する事になった。
艦内では緊急知らせるサイレンが、鳴り響いていた。
「海上救難部署発動！！　総員、所定配置に急げ！！」
副長の声が艦内に流れる。
寺井崎も艦長室に戻り装備を整えると、ＣＩＣに向かった。
艦の外は一向に雨が止む気配は無かった・・・。

？　同日　１０時２５分　やくもＣＩＣ　？
ＣＩＣ内は慌ただしかった。
新栄丸からはいまだ、救難信号が発報され続けている。
「西村、新栄丸と無線はつながらないの？」
水下がそう尋ねると、西村は首を横に１度振った。
「いいえ。無線機材が故障しているのか、何度試しても繋がりません。」
どうしようか考えていると、丁度寺井崎がＣＩＣに入ってきた。
「どういう状況になっているのですか？」
寺井崎が状況を尋ねて来たので、水下が軽く説明をする。
寺井崎は少し考えてから令した。
「航空科に緊急発艦の準備を！！　レーダー、ソナー、艦橋監視を

強化！！
　遭難船の早期発見に努めるぞ。各員、準備にかかれ！！」
寺井崎の命令を受けて、各員がそれぞれに慌ただしく動き出す。
一方で、海は今にも増して時化始めていた・・・。

？　同日　１０時２８分　？？？？？　？
「どうだ、無線は直ったか！！」
切迫した声が船の中を通り抜ける。
「ダメです！！　レーダーは生きてますが、無線は動きません！！」
先ほどの男より若い男がそう返した。
「くっ、救難信号は出したのか！！」
「はい、近くに護衛艦が航海しているようで、届いたのではないかと。」
船は力なく海上を漂っている・・・。

？　同日　１０時４０分　やくも発着艦指揮所　？
「オーライ、オーライ、オーライ・・・ストップ！　ストッパー！！」
シーホークが船尾のヘリポートに姿を現した。
寺井崎の指示で緊急発艦の備を整え、離陸する所だ。
パイロットは木村と河野のペアが捜索に従事する予定だ。
もちろん、やくもも現場へ急行中である。
フライト前の確認を終えると、ヘリに乗り準備を整える。
「発着艦指揮所よりＳＨ６０１へ。現場は本船より、南南東２５ｋｍ地点。
　現場海域に到達次第、要救助者の捜索に当たられたい。以上。」
「ＳＨ６０１より発着艦指揮所宛。指令内容了解、発艦許可を願う。」
木村が主操縦席に、河野が副操縦席に腰を下し発艦許可を待った。
「発着艦指揮所、発艦を許可します。至急、現場に急行されたい。」

ヘリを固定していたストッパーが外され、誘導官から発艦の指示が出た。
「バラバラララララララララララ・・・・・・」
ヘリは真上に上昇してから、南南東の救難海域へ急行した。

？　同日　１０時４２分　やくもＣＩＣ　？
「シーホーク本艦を発艦し、順調に救難海域へ急行中。」
やくもの大型ディスプレイには、海図が映し出されている。
その海図に向かってＳＨが飛んでいるのが見てとれる。
寺井崎は海図を見ながら、手近の海士を呼び止めた。
「海上保安庁の手配はどうなっているんだ？」
「はっ、只今確認してまいります。」
そう言って、海士はＣＩＣを飛び出していった。

しばらくしてその海士が戻ってきて、寺井崎に報告した。
「第１管区海保に問い合わせた所、現在巡視船「つがる」と「びほろ」
「くまたか１号」ヘリが現場海域へ急行中であるとのことです。」
「そうか、持ち場に戻ってくれ。」
海士を持ち場へ戻すと、寺井崎は再び海図へ向き直った。
海図には相変わらず遭難船が点滅を繰り返していた・・・。

？　同日　１０時５０分　ＳＨ６０１機内　？
「正に、零視界ですね・・・。」
河野が悲観的な声でそう言った。
「あぁ、しかしこの天候でも俺らを待っている人がいるんだ。」
ヘリはもうすぐ救難海域へ到着しようとしていた。
「ＳＨ６０１からやくも。間もなく、救難海域へ到着する見込み。
到着次第、当該海域内の遭難船の捜索に当たります。」
レーダーにはまだ、当該船舶が点滅をしていたはずであったが・・・

ふと目を離したすきに、レーダーから完全に消失していた。
するとタイミング良く、やくもから通信が入った。
「やくもからＳＨ６０１宛。レーダーから当該船舶が消失。
レーダー等資機材が故障したものとみられるが、当該海域内の
捜索を行い、遭難船の速やかな発見に努めよ。
並び、第１管区海上保安本部からの通達。くまたか１号機が、まもなく
当該捜索区域に到着する予定。２機で連絡を密にして、早期発見に努めよ。」
レーダーに目を向けると、遠方より「ｋｕｍａｔａｋａ－１」が近づいていた。
「ＳＨ６０１からやくも。くまたかと共同で捜索に当たります。以上。」
ヘリはゆっくりと左旋回をしながら、海域の捜索を始めた・・・。

？　同日　１０時５０分　新栄丸船内　？
「船長、ダメです。レーダーも故障しました。これで発報できません！！」
救命胴衣を着用した船員の一人が、悲痛の声をあげる。
「エンジンは回復できないのか？」
船長が機関士に尋ねる。
「絶望的ですね・・・。幸いにも浸水は見られませんが・・・。」
船長は時化て荒れ狂う海を見ながら呟いた。
「後は、待つだけか・・・。」
無情にも、時間だけが過ぎていく・・・。

？　同日　１１時０１分　くまたか１号機内　？
「くまたか１号機より函館保安部。当該海域へ到達、これより捜索します。」
函館海上保安部から急行したくまたか１号は、ようやく海域へ到着

した。
「函館保安よりくまたか1号。以後は、護衛艦「やくも」とも連絡を密にし、
遭難船の早期発見に努めよ。以上、函館保安。」
「くまたか1号了解。」
次に無線を操作し、やくもに無線を繋いだ。
「こちら函館保安部所属、くまたか1号より護衛艦やくも。どうぞ。」
「こちらやくも、くまたか1号無線感度良好。どうぞ。」
「捜索海域に現着、現在時より捜索に従事したい。どうぞ。」
「やくも了解。現在同海域に於いて、本船ＳＨが捜索従事中。
ＳＨとも連絡を取り合いながら、早期発見に当たられたい。」
「くまたか1号、了解。」
無線を置くと、海に目を凝らしながら捜索を始める。
目を使わなくても、高性能な暗視カメラが付いているのだけど・・・。

？　同日　１１時０２分　新栄丸　？
「無線機類の修理はどうだ？」
船長が船員の1人に尋ねる。
「まだまだ時間がかかりそうです・・・。」
暗い雰囲気が流れ、船内を沈黙が包む。
すると船長が唐突にこう言った。
「みんな、1回飯にしよう！！」
「「「「えっ！？」」」」
船員総出で驚いて見せた。
「ご飯・・・にするんですか？」
船員の1人がそう尋ねると船長は、
「こう言う時でこそ、落ち着いて飯をたべなくてはならん！！」
と、船員に言って聞かせ1人で先にご飯を食べ始めた。

それにならって、船員も1人また1人と食べ始めた。
船内は少し、和やかな雰囲気を取り戻しつつあった。
船は相変わらず、広大な海を漂っていた・・・。

第４章　第３話　「雨の救難信号」（後書き）

大変更新が遅れました事を、改めてお詫び申し上げます。

実を言いますと、この４章では大規模な災害が発生する筈でしたが、震災を受けまして軽率と判断し、更新を中断しておりました。

文章を改訂して、改めて投稿させて頂きました。

更新が遅いですが、読んで頂きましてありがとうございました。

心から、お礼を申しあげます。

これからも、応援ほどよろしくお願いします。

第４章　第４話　「空からの救助者」

第４章　第４話　「空からの救助者」
？　２０１５年６月１５日　１１時１０分　？
？　ＳＨ６０１機内　？
「レーダー、未だに遭難船舶の機影を捉えられません。」
河野がレーダーを見ながら、木村に報告する。
「こっちは全然ダメだ・・・。視界が悪すぎる。」
相変わらず機の外は激しく時化ており、零視界に近い。
「河野、海保のヘリに状況を聞いてみろ。」
「はい、了解しました。」
そう言うと無線機を操作して、海上保安部の周波数に合わせる。
「こちら海上自衛隊護衛艦「やくも」所属ＳＨ－６０１。
遭難船捜索従事中の海上保安庁のヘリは、応答されたい。」
暫くの間沈黙を保った無線機が、ガガという雑音と共に鳴り始めた。
「こちら函館保安部所属「くまたか１」。ＳＨ－６０１、どうぞ。」
どうやら捜索従事中のヘリと無線がつながったようだ。
「現在の捜索状況を知らされたい。当方にあっては、依然発見に至らず。」
河野がそう言うと、すぐに返答が返ってきた。
「こちらも未だ遭難船発見に至らず。現在、最終発報地点１０ｋｍを捜索中。」
「ＳＨ－６０１了解。当方も最終発報地点から５ｋｍの範囲を捜索する。」
「くまたか１号了解。」
交信を終わると、無線周波数を元に戻す。
外は暗さが包みこんでいた。
すると、海面に何かが光ったような気がした・・・。
「機長、あそこの海面に何か光っていませんか？」

「どこだ・・・？」
木村が海面によく目を凝らして見ると、確かに何かが発光している。
「少し近づいてみるか・・・。揺れるから、しっかり掴まっとけ！！」
ヘリが勢いよく降下を始める。
海面があっという間に近づき、高度も２５０ｍになった。
「機長、あれは遭難船ではないでしょうか？」
「わからん・・・。しかし、なんか発光信号でも打ってるようだな。」
「河野、ヘリカメラの映像をやくもへ転送して解析してもらえ。」
「了解です。」
河野は慣れないながらも、機器を操作して転送の準備を整えた。
「ＳＨ－６０１からやくも。光源の解析を願います、転送します。」
映像をやくもへ転送しながら、木村はホバリングを続けていた。
「やくもよりＳＨ－６０１宛。解析の結果、当該船舶と判明。
補助員一名を、当該船舶へ降ろして一度本船へ帰艦せよ。」
捜索していた船が、この船と認められたのであった。
「了解した。補助員一名を下し、帰艦する。」
降下要員に物資を軽く持たせ、ウインチで船へと降下させる。
「位置そのまま・・・・・・・・・・・はい、着いた。離脱完了！」
後部に乗り込んでいる隊員が、降下要員の離脱を確認した。
「了解、ホバリング解除。一度、やくもへ帰艦する。」
ヘリを反転させ、やくもへと進路をとる。
新栄丸から次第に、ヘリは離れて行った・・・。

？　同日　新栄丸船尾　１１時２０分　？
「船長！！　ヘリらしきものが近づいてきています！！！」
「本当か！？」
「はい！！」
無線故障を受け、船尾では交代で発光信号を打ち続けていた。

船長は元々、保安庁で信号を担当していたのでこれを思いついたのだ。
やがて、ヘリから1名の隊員が船尾に降下してきた。
しかし、ヘリはどうやら本船から離れているようだ・・・。
「海上自衛隊です！　船長の方はいらっしゃいますか？」
まだ若そうな隊員が、私を呼んでいるようだ。
「はい、私が新栄丸船長の石堤です。」
「船の詳しい状況を教えて頂けますか？　後、ケガ人は居ないですか？」
石堤は、その隊員に船の詳しい状況を説明した。
「ケガ人は無しで、エンジンが故障しているんですね。浸水も無し・・・。」
「はい、その通りです。」
「分かりました。もう少しで応援が到着しますので、頑張って下さい！」
隊員は持ってきたカバンから、簡易型の無線機を取り出して交信を始めた。
「こちら航空科所属、橋立3尉です。やくも、応答願います。」
初めて、その隊員の名前を聞いたような気がした。
少し間が空いて、無線がガガッと音を立てた。
「こちらやくも、橋立3尉状況を知らされたい。どうぞ・・・」
「了解、負傷者は無いですが、エンジン・無線計器類が故障。自力による避難は困難とみられる。早急な、救助を要請するものである。」
また暫くの間が空いて、無線が鳴り始めた。
「現在本艦は、貴船に向けて進路をとっている。到着予定は、１１３５時。
それまで、当該船舶の船員の安全を確保せよ。以上、交信オワリ。」
無線機を鞄に戻すと、再び船員に向き直った。

橋立は船員に不安を感じさせないように、必死に笑顔を保っていた。
船員たちもまた、少しだけ安心を感じ始めていた。
橋立が船員を見渡していたその時、船の前から船員の1人が走ってきた。
船員は、どこか慌てている様子である。
「船長大変です！！　破損個所不明なるも、船前より浸水確認！」
「何！？　船はどのくらい持ちそうなんだ？」
船長も冷静さを保ちながら、船員に尋ねる。
「破損状況は詳しく掴めていませんが、持って３０分～1時間かと・・・。」
橋立もそれを聞いて、やくもへ再び交信を行う。
「至急、至急。やくも応答願いたい！」
少し間をおいて、無線機から声が聞こえて来た。
「こちらやくも。橋立３尉、どうしましたか？」
「新栄丸の船前より浸水が発生。傾斜角上昇中！！至急の救助を要請する！」
無線状況が悪いのか、少しまた間が開く。
「・・現在保安庁のヘリが急行中。ＳＨも補給完了、現在急行中。ヘリ到着次第、船員の救助活動を優先的に実施せよ！！　以上」
「橋立３尉、無線了解。交信オワリ」
無線を戻すと、船員に聞こえる声で指示を出した。
「救命胴衣をしっかりと着て下さい！　船尾の方へ集まっていて下さいね！！」
船員達は胴衣の確認を済ませると、ワラワラと船尾へ集まり始めた。
海は、未だ穏やかさを見せる気配はない。
橋立が船尾に集め終わると、遠くからヘリのプロペラ音が微かに聞えていた。
音のする方へ目をやるが、零視界の中で確認は難しかった。
ヘリの音は、次第に強まって行った・・・。

？　同日　くまたか１号機内　１１時２５分　？
機長の天見は、零視界の中微かな光を元に進んでいた。
「副機長、距離はどのくらいだ？」
前に集中しながら、副機長に確認をとる。
「もうそろそろの筈です・・・。到着次第、救助を開始しますか？」
「勿論だ。しかし、全員の収容は難しいだろう・・・。」
「はい・・・。残りは、ＳＨにお願いするしかないですね。」
「まぁ、乗せれるだけ早く乗せて帰還するとしよう。」
そうこうしている間に、ヘリは光源の真上へ到着した。
「保安くまたか１号より、新栄丸捜索従事中各局宛。
　現在、当該船舶上空に到達。現在時より、救助活動を開始する。」
無線を入れ終わると、後部ハッチ乗っている隊員の１人が降下準備に入った。
「機長、後２ｍ右でホバリングお願いします！！」
「了解。」
ヘリの操縦桿を少し動かして調整すると、そこで固定した。
「ホバリングよし！　降下、開始して下さい。」
後部ハッチが開き、風が機内に吹き込んでくる。
「前よし、カラビナ・スライダー結着、降下位置クリア！　降下！！」
掛け声と同時に、ヘリから新栄丸へ降下を始めた。
「後２ｍ・・・１ｍ・・・はい着いた。」
降下員の降下を確認すると、直ちに救助を開始した。
１人が下で要救助者を補助し、浮輪上の中にくぐらせる。
１人、また１人とヘリの中へ収容されていく。
「機長、これ以上の収容は不可能と判断。ＳＨへ応援要請を。」
ヘリのギリギリの定員になってしまったようだ。
降下員はそのまま、ＳＨの補助として船に残る。
「保安くまたか１号より、ＳＨ６０１宛。
　現在本機は、収容定員に到達。引き続いて救助を要請する。」

少しの間を開けて、女性の声で応答があった。
「こちらＳＨ６０１。支援内容受諾、引き続き救助を行います。」
「保安くまたか１、了解しました。宜しくお願いします。」
そう言い終わると後部ハッチを閉め、北海道の空港を目指した。
くまたかの後を受けた木村達は、素早く新栄丸上空につけた。
「ホバリングよし！　引き上げお願いします！！」
ハッチが開き、残りの人が次々収容されていく。

？　同日　新栄丸座礁海域　１２時２５分　？
そして、支援員の２人をヘリに引き上げた刹那・・・
船が遂に、北海道の海原の藻屑となって消えて行った。
ヘリは海域を一転し、やくもを目指して飛び去っていった。
丁度、救助開始から１時間の事であった・・・。

第４章　第４話　「空からの救助者」（後書き）

皆様、大変お久しぶりでございます。作者のＳＨＩＲＡＮＥです。
（なんか、変な日本語ですね・・・。）
長々と続けてしまって、反省の念を抱き始めた所です＾＾；
一応、次の５話で４章は終了となります。
その後はですね・・・国外派遣でもしてみましょうか・・・。
あっ、まだ考えている所ですの期待はしないで下さいね＾＾；

余談ですが、また新しい小説も書いていきたいなぁ～と思っております。
最後にですが、読んで頂いた皆様に改めてお礼を申し上げます。

第４章　最終話　「かけがえのないモノは？」

第４章　最終話　「かけがえのないモノは？」
？　２０１５年６月１５日　１２時２５分　？
？　ＳＨ６０１機内　？
「あぁ・・・新栄丸が沈んでいく・・・。」
船長の石堤は、ＳＨの外を見ながら呟いた。
救助員をピックアップしてすぐ、新栄丸は海へ飲まれた。
奇跡的な事に、船員にケガ人は誰ひとりでなかった。
視線を機内に戻して、石堤はある事に気付いた。
「（家族が持たせてくれた御守はどこだろう・・・。）」
微かに湿ったポケットを探るが、何処にも見当たらない。
「（若しかして、私達の身代りとなってくれたんだろうか・・・。）」
生きて帰って来られた事を噛みしめ、ヘリは更に進んでいった。

？　同日　やくも発着艦指揮所　１２時３５分　？
ヘリは最速で飛ばし、１０分でやくもの上空へと到着した。
「こちらＳＨ－６０１。やくもＬＳＯ、着艦指示を願います。」
ＬＳＯに回線を合わせ、着艦の準備を整えた。
重傷者もいないのでやくもへ搬送し、そのまま陸へ運ぶ手筈だ。
「こちらやくもＬＳＯ。着艦を許可、現在は西風２ｍ・艦の動揺は大きめです。」護衛艦への着艦は、とても難しいとされている。
何故なら、陸とは違い船は常に動いているからだ。
その為、海上自衛隊の航空科員は技術が軒並み高くなるというわけだ。
航空自衛隊にも着艦出来る人材は居るであろうが、それを確かめる機会は無い。
「ＳＨ－６０１了解。西の風２ｍ、艦動揺大、着艦支援システムオ

ールグリーン。」
ヘリは艦尾より徐々に近づき、高度を下げて行った。
着艦間際のこの時こそ、パイロットが一番神経がすり減るのだろう・・・。
「着艦位置到達・・・２m・・・１m・・・はい着いた！」
ガクンと位置だけ揺れ、ヘリが船に着艦した。
「ベアトラップ設置！！　着艦固定急げ！！」
格納庫より隊員達が飛び出してきて、素早く固定をすませる。
「着艦固定完了！！　」
作業員の合図を受けて、機内から次々出てくる。
救助者が出たのを確認して、木村と河野は操縦席を後にした・・・。

？　同日　食堂　１２時４５分　？
助け出された石堤らは、ひとまず食堂へと案内された。
やくもも、訓練行程を中止して留萌港へ帰還中だ。
食堂へ入って暫くすると、艦長の寺井崎２佐がやって来た。
立ちあがって敬礼をしようとすると、寺井崎がそれを手で制した。
「いいから、座っていて下さい。」
寺井崎からそう言われ、上げかけた腰を再び下ろす。
「私が艦長の寺井崎と申します。あなたが船長の石堤さんですか？」
石堤は手に持っていたお茶をテーブルに戻して、寺井崎に向き直った。
「はい、私が新栄丸船長の石堤です。今回は、ご厄介になっています。」
石堤は頭を深々と下げた。
「いえいえ、船に乗っている時に起こるかもしれない事ですので・・・。
　何より、誰ひとりお怪我がなかったことが何よりです。」
「はい、速やかな救助を本当に感謝している限りです。」
寺井崎は石堤と軽く話すと、下士官に世話を任せ艦長室へ戻って行

った。
留萌の港も、あと2・3時間で見えてくる事だろう。
？　同日　やくも艦橋　１４時４５分　？
「前方に留萌港を視認。入港許可を願います。」
2時間をかけて、やくもは留萌港へ到着した。
「入港を許可、入港準備部署発動！！　入港準備急げ！！」
寺井崎が手短に命令を下すと、艦内が俄かに慌ただしくなってきた。
「両舷前進微速！　バウスラスター作動！！　所定埠頭へ入港。」
寺井崎の命を聞き、艦内へと復唱される。
「バウスラスター作動、両舷前進微速！！　所定埠頭入港始め！！」
航海科員は艦外へ出て、舫いの準備に取り掛かっている。
先程まで降り続いた雨は、霧雨へと変化していた。
やくもはゆっくりと留萌港内へ入り、いつもの埠頭を目指した。
「各部署、入港作業監視を厳に！！」
寺井崎が艦内へ向けて令した。
埠頭にはすでに、作業員が待機している。
船はやがて、彼らの待つ埠頭へ到着した。
「投錨！！　舫い固定急げ！！」
錨が下され、船は元の場所へと収まった。
埠頭には数台の救急車が救助者の搬送を待っている。
「要救助者を救急隊へ搬送、引き継ぎを急げ。」
やくもへ収容された要救助者は、隊員に連れ添われ無事地面に足を着けた。
石堤らは念のため、病院で検査を受ける予定である。
長く感じられたその時は、無事救われたのだろう。
寺井崎も報告書をまとめ、総監部へ出頭をしなければならない。
なんせ、訓練が一回無くなってしまいましたから。
けれど、人命が救われた事が何よりの成果だと寺井崎は思っている。
「訓練にも要救助者搬送訓練って言うのがあったしな・・・。」

実戦にまさる訓練は無い・・・。
やくものクルー達は、また1つ大切な事を学べた。
どの様な事でも、人の命が最優先であるという事を・・・・。

？　同日　19時00分　首相官邸　？
「では、これで閣議決定とみなしてよろしいですね・・・・。」
首相官邸では、閣僚が集められ会議が行われていた。
しかし、いつもとは雰囲気が心なしか重たく感じる。
「えぇ、基本的にですが・・・・・・」
話は更に進んでいく様子であった。
この閣議こそ、やくもには大きな決断であっただろう。
果たして、閣僚たちは何を決めようとしているのか・・・？

第４章　最終話　「かけがえのないモノは？」（後書き）

どうも、作者のＳＨＩＲＡＮＥです。
やっと、第４章が完結しました。
内容は・・・まぁとしまして、皆さんから見てどうなのでしょう？
かなり自己満足な文を書いている気もしますが、それでも
読んで頂いている読者の方にはただただ、頭の下がる思いです。

一応、この話しも進め参りますが・・・
他の作品の方にも着手していきたいと考えております。
自分的には、学園モノも書いてみたいのですが・・・。
何はさておき、これからもＳＨＩＲＡＮＥをヨロシクお願いします
＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8118j/

護衛艦奮闘記

2011年10月22日21時29分発行